れてをる。さもなくば當然懲罰だ』

『懲罰!!　懲罰と云つたな!!』

カシウスは怒りで身を慄はせてゐる。しかしブルッスは遠慮しない——

『忘れ給ふな三月を!!　あの三月の十五日を!!　ケーザルは何故血に染つた?!　正義の爲ではなかつたか?!　え、何うです?!　盜賊を庇ふやうな所行が、少しでもあつたればこそ、世界に比類なき英傑さへも用捨なく刺し滅した我々——その我々が、今となつて、卑しき賄賂に指を染める……?!　それがローマ人であるなれば、犬となつたがまだ優しぢや!!』

こゝで一寸我々讀者は、カシウスに同情してやらねばならぬ。カシウスこそ全ての同志の中で、最も手腕家であるかはり、最も惡慧い最も喰ない、そして最も冷酷な實行家であると云つてよかつた。しかし唯一つ、此の男の心の中に優しい美しい情愛がある。それは友人ブルッスに對する燃えるやうに強い愛情なのだ。此の愛情があればこそ、カシウスはブルッスのする事を、今迄どんなに不賛成でも結局は折れて承知し

てゐた。アントニウスを生かした事でもさうだ。群衆の前でアントニウスに大演說をさせた事でもさうだ。ずいぶん「之れは」と思ふ事があつても、大抵はブルッスに讓歩つて來てゐる。しかもその結果を見れば、悉くカシウスが正しくてブルッスが間違つてゐたではないか。かうなるとカシウスのブルッス崇拜は一種の迷信だと云ふの外ない。

それだのにこゝでもブルッスから、不正な事をすると云つて、散々にお叱言を頂戴し、頭ごなしに罵られてゐる。しかもそのブルッスはと云へば、あまりに潔白すぎる爲に、今の場合金を作る唯一の方法である住民からの取立ができず、その結果自然金に困つて再三カシウスに無心をした人物だ。——これではカシウスも辛抱しきれまい。否、果して勘忍の緒を切つてしまつた——

『ブルッス、さうさう口を尖らして喰つてかゝるのは止して貰はう。幾ら私でも我慢が出來ぬ。身の程を知り給へ!!　私は之れでも軍人だ。君よりはずつと年功者だ。世間の苦勞が積んでゐるだけ、場合々々の手心を心得てゐる事にかけては、君よりも

ずつと優つてゐる』

するとブルッスは執拗くもその言葉尻を捉へて叫ぶ――

『何と云はれる？　私よりもずつと優つてゐるとな?!』

『えゝうるさい!!　もう大抵になさるがよい!!』

『いや確に承はりましたぞ。私よりはずつと優つてゐると!!』――ブルッスは幾度も鼻で笑ひながら――『私よりも君の方がずつと立優つた武人であると申されるのだな?!』

『いや何も武人として腕が立優つてゐるとは申さぬ。唯武人として年長だと云ふのだ。何時優つてゐると云ひました？』

『云つても云はんでも、どうでもよろしい……一體君は私を威嚇す氣なのか？　正義の甲冑で身を固めてゐる私には、君の威嚇などは風が吹いたも同然、一向怖ろしいと思ひませぬよ』

そして今度はカシウスが、金を拒絶つたことを責め出した――

『私は誰かのなさるやうに、卑劣い手段で住民から金を捲き上げようとは思はぬ。百姓から端た金をもぎ取るよりは、自分の血で貨幣を作つた方がよい。君はよくそれを御存じの癖に、私が無心をした時には、無下にそれを拒絶りなすつた。それがカシウスのなさる行爲か？』

『いや拒絶つた記憶はない』――と、カシウスは簡單にかう答へた。（これは實際の事だつたのである）

『拒絶つたとも!!』――とブルッス。

『いや拒絶らぬ。若し拒絶つたと云ふならば、私の返事を傳へた使が白痴だつたに違ひない。噫、親友と云ふものは、たとへ少しの過失があつても、親友のした事は許してくれる筈のものだと思ふのに、ブルッス、君は私のした事を實際より却つて大きくして責める。今は又何をか云はんやぢや。來れアントニウス!!　來れオクタヴィアヌス!!　此のカシウス唯一人を敵として腹一杯復讐して呉れい。カシウスはもはや此の世が嫌ぢや。愛する一人の友人にまで憎い敵のやうに見放され、奴隷のやうに罵ら

れ、わづかな過失も一つ一つ鬼の首のやうに調べ上げた揚句、（書き止めたか暗記したか）面と向つて算へ立てられては、生きてをる價値がないも同然!!　さあカシウス!!　此の通り此處に短劍がある。私の胸は此の通り赤裸ぢや。「金を出すのを拒絶つた」と、君がどうしてもさう云はれるなら……よろしい。金を拒絶つた此の私の胸を、ケーザルを突いた時のやうに、いつそ一思ひにやつてくれ給へ』

かうカシウスが叫ぶのを聞いてゐる内にブルッスの胸は、次第次第にやはらいで來た。自分の方が惡いとは、未だ決して思はなかつたけれども、カシウスが氣の毒になつて來たのだ――

『まあ劍を鞘に納め給へ。さう云はれては罪があつても君を許さぬわけには行かぬ。私は長く何時までも、憤つてゐる事は出來ぬ性分だ』

『冗談ではない。それでは此のカシウスは、君から戲られてゐたやうなものだ』

『いや私の癇癪が惡かつたのだ』

『おゝ、君はさうまで云つてくれるのか?!』――とカシウスも態度を改めて――『ブ

ルッス君、手をくれ給へ』

『うむ、手ばかりか此の心も』

かうしてブルッスとカシウスは、固く手と手を握りしめながら、大分心も解けて來てゐると、戸口で何か物騒がしい人聲がしたと思ふ内、マルクス・ファオニウスと云ふ名の狂氣じみた男が飛び込んで來た。これはブルッスに使はれてゐる哲學者氣取りの人物であるが、する事が一々變てこなので、皆からは白痴扱ひにされてゐた。先程から主人とカシウスが何か爭ひをしてゐると聞き、仲直りをさせるつもりで、見張りの制めるのもきかず此の場へ入つて來たのである。

入るや否や此の先生は、妙に氣取つた姿勢を作り、ホーマーの詩の一節を聲高々と吟誦じはじめる。その身振の可笑しさに、カシウスは、思はず吹き出したが、ブルッスは少し腹を立てゝ部屋の外へ逐ひやつた。

しかし心からの笑ひほど、憤りを消すものはない。ホーマーの詩が歌はれてカシウスが洪笑ひ出したお蔭で、急にその場がやはらいでしまつた。笑はなかつたブルッス

は、やはり眉を顰めながらも、給仕の少年を呼び出して、酒を持つて來いと云ひつける。

『君があんなに怒らうとは、私は夢にも想はなかつたよ』

と、カシウスはすつかり上機嫌で云つた。するとブルッスは決心したやうに——

『おゝカシウス君、實は私には色々と悲しい胸の病があるのだ』

『胸の病?! だつて君はストイック（ローマではやつたストア派の哲學者。一口に云へば「世の中の下らない事には迷はされずに自分だけ清い正しい生活をする事」を主義とする人）ではなかつたか?! 浮世の心配事などは、その哲學で消せさうなものだが』

『うむ、さうも思つたが……。此の悲みは又別だ。實はポルティアが歿つたのだ』

『えつ?! 奥さんが?!』

『さうだ、死んだのだ』

前にブルッスには煩悶があると云つたが、これで事情が解つたであらう。——あまりの事にカシウスは、しばらく口も利けなかつたが、やがて感極まつて叫ぶ——

『おゝ、それとも知らずに君を憤らせて……よく君に殺されなかつたものだ!!』

ブルッスの妻ポルティアは、夫の逃走を氣に病んだ上、オクタヴィアヌスとアントニウスとが合體して夫を討つと聞き、遂に心を狂はせて、自殺し果てゝしまつたのである。ブルッスは此の事情をば、淋しく靜かに物語つた。カシウスは再び聲をあげて叫んだが、ポルティアが何よりも愛してゐた當の夫ブルッスは、さすがに却つて落着いてゐた。

『カシウス君、もうその話は止めにしよう』

そして騷がずかう云つた時、給仕が酒を持つて入つて來た。そこで兩名の友人は、まづ各自盃をあげて、互の友情を誓つてから、隊長達をも呼び入れて、作戰計劃に耽けることとなつた。

まづ最初にブルッスは、ローマにある敵方から最近送られた報導について、一同と議論を闘はせたが、カシウスは碌に聽かうともせず、唯ぼんやりと椅子によつたまゝ口の中では相變らずポルティアの事を呟やいてゐた。その氣の毒な死に方が、餘程心に響いたのであらう。

しかし、やがて誰かの口から、「執政官（三頭政治をつてゐる三人）の公敵宣言（國賊と認める人の名をあげ、之に刑罰を加へる旨を發表する布告）によれば、キケロも死刑に處せられたらしい」と、語られるのが不圖耳に入ると、さすがにカシウスも駭然として、席を起たずにはゐられなかつた――『えつ?! あのキケロが……!!』

萬感胸に迫つたと云ふやうな、その駭き方を見たブルッスは、輕く「さうだ」と答へてから、改めてカシウスの方に向き直り、次のやうに質問する。これで沈んでゐたカシウスもすつかり我に返つてしまつた。

『聞けばアントニウスとオクタヴィアヌスとは、トラキア、マケドニアの國境であるフィリッピの地に出陣すると云ふ。そこでカシウス君、君はどう思はれる？ 一層當方よりその地に進發んで、彼等を邀へ擊たうではないか』（後圖參照）

カシウスは即座に反對した。

『いや、敵を出來るだけ遠方まで來させて、疲れさせた方がよい。當方からわざわざ出掛けて行くのは、敵の疲勞を助けてやるやうなものだ』

しかしブルッスは、その議論を聽き入れようとはせず――

『小アジアの住民共は、今でさへ我軍に好意を有たず、稅を出すのも嫌がつてをる。オクタヴィアヌスとアントニウスとが、若し此の地方まで進軍して來れば、途中の住民達は續々とその軍隊に加はつて、却つて敵の勢ひが、進む毎に强くならう。それよりは當方から進軍して、敵を喰止めたがよいと思ふ』

此の時カシウスが飽くまでも、自分の說を云ひ張ればよかつた。（今度もカシウスの云ふ方が確に正しかつたのである）しかし、例によつてブルッスを愛敬する念の强いのと、折角仲直りしたばかりで喧嘩するのが嫌だつたのとで、結局やはりブルッスに讓步することゝなつてしまつた。

そして、ブルッスの意見どほり、翌日より進軍を始める事と定り、今日の會議も終りを告げたので、『御機嫌よう』『お寢み』と、心からの別れを交して後、カシウスは明日の日を約して、自分の陣營に引き取つて行く。

（九）亡霊

出陣の會議が終つた時は、夜ももう可成り遲かつた。カシウス等を送り出したブルッスは、唯一人天幕の中に殘る。すると人の去つた淋しさに加へて、何となく不吉な不安の豫感が、心の上に蔽ひかぶさつて來た。いくく出陣の前夜らしく雄々しい元氣を振ひ起さうとしても、とかく沈み勝になつてくる。

そこでヴァロにクラウデゥスと云ふ二人の部下を呼び入れて、自分の部屋の中に寢かす事にした。兩名は勇んで一晩中見張の役をつとめようと云つたが、ブルッスは、例によつて慈愛深く、それには及ばんと拒絶つて、無理に横にならせてしまふ。そこへ奴隷のルキウスが、主人の上衣と書物とを持つて、忠實にその場へ入つて來た。可愛さうに此の少年は、ずいぶん寢不足なのである。

ブルッスは泌々氣の毒になつて、此の上用を命令るのは無情だとは思ひながらも、

此の男が巧みに彈くリュート（琵琶のやうな昔の樂器）の音が聞かして貰ひたくなつた。

『ルキウス、疲れたところを濟まないけれど、リュートを持つて來て彈いてくれないか』

ルキウスは此の主人の言ふ事なら、火の中へでも入る男であつた。それほど深くブルッスを愛し敬つてゐるのである。早速樂器を膝に取りあげ、靜に弦を搔き鳴しながら、得意の歌を歌ひはじめる。兩名の兵士はいつの間にか死んだやうに眠つてしまつた。

しかしさすがにルキウスも、日頃の疲勞には克てなかつた。やがて歌の聲が途絶えたかと思ふと、弦の音も切れたやうに止んで、樂器は膝から滑りさうになる。ブルッスはすつかり痛ましくなつて、そつと樂器を取り上げてやると、少年はそのまゝ頭を落して、睡眠の國に入つてしまつたのである。

今ではブルッス唯一人が、此の淋しい天幕の一室に、起き殘されてゐるばかり。これも淋しげに唯一つ、しよんぼり點つてゐる小蠟燭の光に、椅子を近く寄せながら、

ブルッスは先刻持つて來て貰つた書物の頁を繰りはじめる。

かうして、更け行く夜の幾分かが經つた。――蠟燭の火が盡きはじめたのか、それとも火の上に何かの影が蔽ひかぶさりでもしたのであらうか――急に暗くなつたやうな氣がして、ブルッスはふつと頭を上げた。おゝ正しく影――しかも立派に形のある影――死んだ筈のケーザルが、歴然と其處に立つてゐるのだ。一目仰ぎ見たブルッスは、忽ち全身の血と云ふ血が凍つてしまつたかと思つた。我知らず咎めるやうに叫ぶ

――

『何だ其方は？』

『ブルッス、御身を怨む亡靈』

『何故で來た？』

『再度フィリッピで逢ふ事を、御身に告げ知らせんが爲に』

ブルッスは思はずわな〳〵と慄へた。しかし氣を取り直すと、我と我が身が恥づかしくもなつて、半ば嘲笑に紛らしながら、力無い聲で訊き返した――『ふむ。再度逢

ふ？』

『左樣。フィリッピで』亡靈は靜に繰返へす。

『よし、では又逢はうフィリッピで』

云ふなりトンと拳固をあげて卓の上を一つ敲いてから、

『ルキウス!!　ヴァロ!!　クラウデウス!!　起きろ!!』

そして今一度見直すと――不思議――亡靈の影もなかつた。

『旦那樣、此弦の調子が狂つて……』

その時少年ルキウスは、やはり樂器を抱いてゐるつもりか、夢の裡に呟き出す。ブルッスは直ぐ搖り起した。二人の兵士も驚いて起きる。

『何故大きな聲をした？　何か見えたか？』

しかし三人が三人とも別に見たものはないと云ふ。「可笑いな、確に聲を聞いたやうだが」――とは云へ三人が何一つ見なかつたのは眞實なのである。

では、ブルッスの目がどうかしてゐたのか?!　ブルッスも何一つ見た譯ではないの

か?! 多分さうであつたのであらう。

しかし、やはりケーザルの亡靈――ケーザルの遺志を嗣ぐ者は、正しくフィリッピの平原に、ブルッス等の來るのを待つてゐたのだ。亡靈の待つフィリッピの平原――翌朝ブルッスとカシウスとは、各自歩、騎兵の一軍團を從へ、西の方その平原を指して、小アジアを進發したのである。

何となく死の神の手に招かれて、破滅の影の宿る所へ、一歩々々進み入るのをさすがに心に感じたのであらう――いよ〳〵陣頭に立つた時も、兩將は殆ど語り

合なかつた。そして、海峽（今のダーダネルス海峽の所地圖參照）を渡つた全軍が、嚴めしき敵の陣營を目前に見る邊りまで、トラキアの地を超えて進軍した時、「破滅の影」はありありと、味方の上に蔽かぶさつて、いまはしい前兆を見せはじめた。サルディスを出發して間もなく、何處からともなく二羽の鷲（鷲は捷利のしるしと云はれて、芽出度い鳥とされてゐます。）が軍旗の上に舞ひ降りて、芽出度き武運を護るものの如く、その頂きに止つてゐたのが、今このフィリッピに着く頃になると、再び何處ともなく翔り去つてしまひ、その代りに一群の惡鳥――大鴉（大鴉は西洋の傳說などによく現れて來る鳥で、人の言葉が解るとも云はれ、氣味惡い鳥とされてゐます）烏、鳶の類が、八方より群れ集まつたのである。口々に不吉な啼聲をあげて、味方の頭上を飛び交ふ惡鳥は、やがて來る敗軍の後に於て、自分等には何よりの馳走である夥しい人馬の死屍を喙む事ができるのを、前以つて知つてゐるものの如くであつた。

ブルッス、カシウスの兩將も、馬を敵前に進めながら、心は怪しくも沈み勝であつた。戰鬪の朝此の兩將は、互に勇しく訣別を告げたが、唯勇ましいばかりではなく、之れが今生の死別である事を悲痛にも思はせる樣な、世にも嚴肅な別れ方であつた。

『若し神々の加護によつて捷利が味方の上にあるならば、再び微笑の裡に逢つて、ありし日の事を打ち語らひ、二人の生のあらんかぎり、親友として世を送らう。若し又一敗地に塗れた時は?! ——よろしい、その時はその時である。「三月の十五日に始められた仕事」が、今日の日を以て終るのである。潔よく運命の下るのを待たう。しかし如何になり行くとも、又如何なる敵將と雖も、ブルッスとカシウスを生きながら故郷の土産に引具して、凱旋の誇りとする事は、所詮かなはぬ望であらうぞ』

これを別れの言葉として、二人は袂を別つたのである。

（一〇）フィリッピの戰ひ

いよ〳〵兩軍が劒の間に相見える事となつた時、ブルッスは自分と相對するのが、オクタヴィアヌスの軍であり、アントニウスはカシウスと戰ふことになつてゐるのに氣づいた。

抑々アントニウスとオクタヴィアヌス——此の二人の執政官が、心から一致する事は、最初から出來ない相談であつた。唯運命の導きのまにまに、一時その手を握り合つたに過ぎない。二人の性格は全ての點で、雪と墨ほども異つてゐたのだ。熱情家で才人で遊蕩好きである年上のアントニウスには、自分の子供と云つてよい程の若僧であるオクタヴィアヌスが、嫌に氣味惡く落着きはらつて、口數も利かず思ひ通りに、どん〳〵と萬事をやつてのけて行くのが、かね〳〵癪にさはつてゐた。今度戰ひをする場合となつても、アントニウスは自分自身がブルッスに對ひたかつたにも拘らず、いよ〳〵開戰となつて見ると、オクタヴィアヌスは相談一つせず自分が對ふ事にしてしまつたのである。

『君は何故私に反對ひなさるのだ?』

その勝手な命令を聞いて、アントニウスは不平さうに叫んだ。

『別に貴下に反對はしません。唯、私はかうしたいのです』

オウタヴィアヌスは眉一つ動さず、「論ずるまでもない」と云つた風で、かう瞭然

と返事をする。アントニウスは二の句が告げなかつた。

さてブルッスは、自分に對陣つてゐるオクタヴィアヌスの軍が、どうも旗色の鈍いのを見てとり、言下に進擊の命を下した。果して最初の突擊によつて、敵は見る〳〵崩れ立ち、味方の兵は得たりとばかり思ふ存分に首を獲て、散々に之れを追ち退ける——若し友軍のカシウスにさへ之れが解つてゐたならば、此のブルッスの敏捷な處置は、非常な效果を奏したであらう。が、カシウスは之れを知らなかつた。そして實際はどうであつたかと云へば、カシウスは一方アントニウスの爲に、同じくその陣を打ち破られ、聲を限りに叱咤する間に、すつかり敵から包圍されてしまつた。しかしまだブルッスが救ひさへすれば、充分救ふ事ができたばかりでなく、それで勝敗は全く定まつて、凱歌は味方に上つたのであるが、如何にせん勝ち誇つたブルッスの軍は、オクタヴィアヌスの陣營を圍んで、功名と分捕とに夢中であつた爲、時を移さず呼び戻して、新しい戰場に向はせる事は、遂に不可能だつたのである。

今やカシウスの騎兵達は、一散に海を指して走り、殘る歩兵隊が唯僅にカシウスを

護つて防禦ぐばかり、カシウスは此の歩兵隊を確乎と手許に取り纏めると同時に、旗手の手から軍旗を奪ひ取つて、自ら之れを高く掲げ、以て備へを立て直しつつ、ブルッスの救援を待つのであつた。しかし望の影さへも見えない。

今は之れまでと思つたので、カシウスは再び軍旗を取り下し、とある小高い丘に引上げた。此の丘の上にさへ上れば、戰場が一目に見渡せるのである。傍には僅か二三の人が附き從つてをるばかり。

カシウスの眼は霞み切つてゐたけれども、その惡い眼にも歴然と自分の陣の燃え上るのが見え、アントニウス麾下の勝ち誇る軍が掠奪を恣にするのが解る。暫時は齒を嚙んで之れを見てゐたが、ふと氣がつけば、一隊の騎兵が正に此の丘の方に向ひ、砂塵をあげて近づくではないか。敵か味方か?! ——カシウスはそれを見定めさせる爲に、附き添つてゐた中の一人ティティニウスと云ふ友人を、その方に出掛けさせる一方、今一人のピンダルスと云ふ召使を丘の絶頂に登らせて、更によく注意させる事にした。

此の一隊の騎兵こそ、時は既に遅かつたけれども、實にブルッスから遣はされた捷利の使だつたのである。ティティニウスの姿を見るとひとしく、それがカシウスの友人であると知つて、騎兵達は思はず我を忘れ、勝利を誇る歡呼もろとも、どつと周圍に馳せ寄つて行く。

丘の上にあるピンダルスは此の有樣を正しく見た。「わッ」と云ふ鬨の聲を聞き、ティティニウスが騎兵達に圍まれるのを見た。しかし——天なる哉——その理由を全く取り違へてしまつたのである。「ティティニウス殿は敵に遭つて捕虜となられた」と信じた奴隷は、やにはに足下の主人に向ひ、事の由を叫び告げた。

『降りろ!!』とカシウスは云つた。

そして今は唯兩人丘の麓に立つた時、カシウスはやをらピンダルスに向つて——

『お前を私が捕虜としたのは、パルティアの戰ひの時であつた。お前の生命を助けた代りに、お前を私の奴隷とし——私に忠誠を誓せたのだ。そして、私がどんな事を命令ても、必らず聽くと云ふ約束をさせた。さあ、今こそ自由の身としてやる。(奴隷はほ

とんど共主人に買はれたと同じ境遇で人としての自由はないのです)約束通り主人が命ずるのだ!! 遠慮をする事はない。これ此の劍で、私が顏を手で隱すのを合圖に、ぐざと此の胸を突いてくれ!! 此の、ケーザルの胸を刺したその劍で』

ピンダルスは默つてその劍をとつた。そして主人の心臟を目がけて、ぐざとばかりに突きさした。ばたりと其の場に仆れ伏すカシウス。見るより劍を打ち棄てゝ、ピンダルスは走り去つた。何處へ去つたかは遂に解らぬ。

一方騎兵達に圍まれたティティニウスの喜びは例へ樣もない。大將カシウスに贈るべき捷利を祝ふ花冠を、まづ自分の額に飾り、一刻も早く吉報を傳へたいものと足を空にして、元來た道に馳せ戻る。そして丘に登らうとすると、何物かにはたとつまづいた。おゝ、それこそ、心なき奴隷の手に死んだカイウス・カシウスの屍骸であつた。兩手を開いて迎へ取る筈の人は、空しく地上に横つて喜びの聲も聞けないのである。

心づくしの花冠も、今は悉く無用となつた。ティティニウスは恭しく身を屈めて、冷たき眉の上の邊りにその花冠を輕く結んだ。そして、猶豫ふ所なく、死を見る事士

芥の如く名譽を思ふこと太陽の如きローマ人の本領を發揮して、矢庭に我れと我が胸を刺し、カシウスの屍骸に折り重なつた……。

數人の幕僚を引具したマルクス・ブルッスが端なくも此の丘の下を通りかかつたのは、それから間もない事であつた。ブルッスはじつと頭を下げて、二つの屍に拜を捧げ、靜に最後の別れを告げる——『最後のローマ人よ(ローマ人の典型よ)』ブルッスはその弔辭の中で、かうカシウスの事を呼んだ。別辭が終ると誰にともなく——

『諸君!! 私が此の死んだカシウスから、今日までに受けた情——此の私の爲に流して貰つた涙の恩と云ふ物は、とても返擠しきれるものではない……おゝカシウス!! 今に返擠すぞ!! 今に……!!』

噫、ケーザルの亡靈は、(ブルッスも思はず叫んだのであるが)やはり正しく此の地上に——此の平原にさまよつてゐたのだ。(ブルッスの所には戰ひの前夜に現れたと云ひます) そして憎い謀叛人の劒を、謀叛人自身の身に向けさせたのだ。ブルッスの番も遠くはない。

第一戰が本當の決戰とまで行かなかつたので、ブルッスは更に第二戰を挑んで、運

命の骰子を投げて見た。しかしその結果は徒らに、僅數人の部下と共に戰場から逐ひやられる悲運に陷つた。ブルッスも今は覺悟を極めて、その數人の人々を、一人々々傍に呼び、あのピンダルスがカシウスに對つて行つたと同じ大事を、「自分の爲に」決行てくれと、順々に賴んで見たけれども——ブルッスを愛する深き人人の——誰一人合點く者とてはない。

しかし、遂に最後に、奴隷の一人が合點いてくれた。さすがに頭をそむけながら、その奴隷は思ひ切つて、渡された劒をじつと突き出す。「曾て同じ劒をケーザルに向つて振り上げたその瞬間よりも、今の方が遙かに快いぞ」と、口の内に叫ぶより早く、ブルッスは我と我が胸を、その穗先に投げかけたのである。(ブルッスが自分の手で自殺したのは平生の主義からでせう)

さすがにその敵でさへも、マルクス・ブルッスの屍骸は、決して粗略にはしなかつた。そして名譽ある儀式の下に厚く之れを葬つた。アントニウスはかう叫んでゐる——

『之れこそ敵中で最も優れた——最も氣高きローマ人である。彼を助けた其の餘の

一味は、いづれもケーザルの偉業を嫉妬んで、暗殺を企てたのであるが、此の人物だけはさうではなかつた。眞に正大なる理由よりして――眞に國家の爲と思つて、ケーザルに刃を揮つたのは、正に此の人物唯一人である。その一生は清廉く、その資性は高邁く――造化の主自ら立ち上つて、「これこそ眞の人間也」と、全世界に宣言すべき人物である』

（大尾）

（編者曰）ブルツス等が滅んでしまふと、ローマの大領土は三頭政治の下に、一時三分されてゐましたが、幾程もなくレピツスがまづその領地を失つてしまひ、オクタヴィアヌスはイタリアに、アントニウスはエジプトにあつて、それ〴〵勢威を誇つてゐました。しかしやがてアントニウスは、「その鼻が今少し低かつたならば世界の歴史が變つたであらう」とまで云はれた、ナイルの女王クレオパトラに迷ひ之れと結んでローマに叛いた爲、オクタヴィアヌスは大軍を發して、まづアクチウムの海戰に、アントニウス等の艦隊を破り、遂に之れを滅しました。やはりシェークスピアの作である名高い「アントニイとクレオパトラ」は、之を題材にとつたものです。その後のオクタヴィアヌスは旭の昇る勢で、所謂アウグスツス時代を史上に現出せしめた事は、前の所に述べた通りです。

しかし、今迄ずいぶん歴史を述べましたが、一つ御注意願ひたい事は、シェークスピアは決して單に歴史によつて書いたのではありません。唯歴史上の大人物を思ふまゝに捉へ來つて、これに新しい生命を吹き込んだ所に、シェークスピアの偉さがあるのです。アントニウスの演說の如きも、全然シェークスピアの創つたものです。編者は唯讀み續き上の便利と、歴史的の興味との爲に、說明を加へたにすぎません。

ジョン王

ジョン	英國王	
アーサー	ジョンの兄ジェフリーの子	
フィリップ二世	佛國王	
フォールコンブリッヂ	ジョンの兄リチャードの子	
ルキ	佛國皇太子	
リモージュ子	佛國貴族	
シァティヨン	フィリップ二世の使節	
インノケント三世	ローマ法王	
バンドルフ	インノケント三世の使節	
ヒューバート・ド・バーグ	ジョンの侍從	
サリスベリー伯		英國貴族
ペンブローク伯		英國貴族
ビゴット伯		英國貴族
コンスタンス	アーサーの母	
エリノア	ジョンの母	
ブランシュ	ジョンの姪ルキの妻	

ジョン王

（編者曰）シェークスピアの英國史劇中の名高い一つである本編に入るに先立ちまして、まづ一通り開國以來の英國歴史を知つて置く事は、殊に我國の少年少女諸君にとつては、非常に必要だと思ひますので、最初まづ簡單に、それを説明することにします。

最初今の英國の島々――即ち當時のブリタニア地方に居つたのは、野蠻なブリトン人でしたが、ユリウス・ケーザル以來ローマの手が此方面にも伸びて、アウグスツス時代後間もなく（即ち紀元一世紀の末）ローマ大帝國の一州となり、以後約三百年はその儘に過ぎました。ところがローマ帝國も末となつて、今のヨーロッパの北部中部にゐたゲルマニ民族が、潮のやうに帝國内になだれ込んで來る――所謂「ゲルマニ民族の大移轉」と云ふ物が始まりますと、やはり其ゲルマニの一族であるアングル人サクス人（後には一つになつてアングロサクソン）等が、海を渡つてイギリスの地に入り、ブリトン人を征服して、こゝに七つの王國を立てました。此の七王國は其後二百年の間續きまして、これを七王國時代と云ひますが、紀元九世紀の始め七王國の一つであるウェセックス王エグベルトが始めて全國（今のイングラン

ド地方）を統一してイングランド王國（即ち日本で云ふイギリス國）を建てたのです。ところが此頃また、今のノルウェー、デンマーク地方に、やはりゲルマニ民族のノルマン人と云ふ物があつて、海を我か家のやうに心得、之れがヨーロッパ各地の海岸を海賊のやうに荒し廻つたのです。そしてイングランドも、デンマークにゐたデーン人と云ふノルマンの爲に、長い間苦しめられました。エグベルトの孫にアルフレッド（有名なアルフレッド大王）と云ふ英雄が出て、一時は之れを壓へたけれども、其死後遂にデーン人の王カヌート大王が、イングランドを征服してしまひ、一大强國を作つたのです。（十一世紀）。其後一旦元の王家の子孫エドワードが位に即きましたが、子がなかつた爲、再び、やはりノルマンの子孫であるフランスのノルマンヂー公ウィルレムが、武力を以て王位に昇りました。これが英國のノルマン王家の祖先です。

（フランスの事も本篇に關係が深いから一寸一言しますと、ゲルマニ民族の中のフランク人が今の佛・獨二國の地方にフランク王國を建てたのが始まりで、二百年の後カロロ大帝と云ふ大英雄が現れ、ほとんど今のヨーロッパ大陸全部にまたがる大帝國を建て勢威を世界に振ひましたが、其死後帝國は東フランク西フランクの二つに分れました。東フランクは即ち後のドイツ。西フランクが後のフランスです。ノルマン人の侵入が始まると、西フランク――即ちフランス――は特に苦しめられ、遂にノルマンの首領ロロと云ふ人物に國内に領土を與へてノルマンヂー公として和を結んだのです。ウィルレムはその子孫です）

さて、イングランドにノルマン王家が出來る頃から、ノルマン人は次第に元から居たアングロサクソン人と同化し、こゝに新しい言語と風俗とを生じて、現在のイギリス人と云ふ物が出來上つたのです。ノルマン王家は三代續きましたが、三代目のヘンリー一世が死ぬと世嗣がなかつたので、自然血統が絶えました。そしてフランスの諸侯の一人アンジュー伯ジェフリーと云ふ人が、ヘンリー一世の娘マティルダと結婚してゐたので、其間に出來た子――即ちヘンリ一世の孫に當る人が、フランスから來て王位

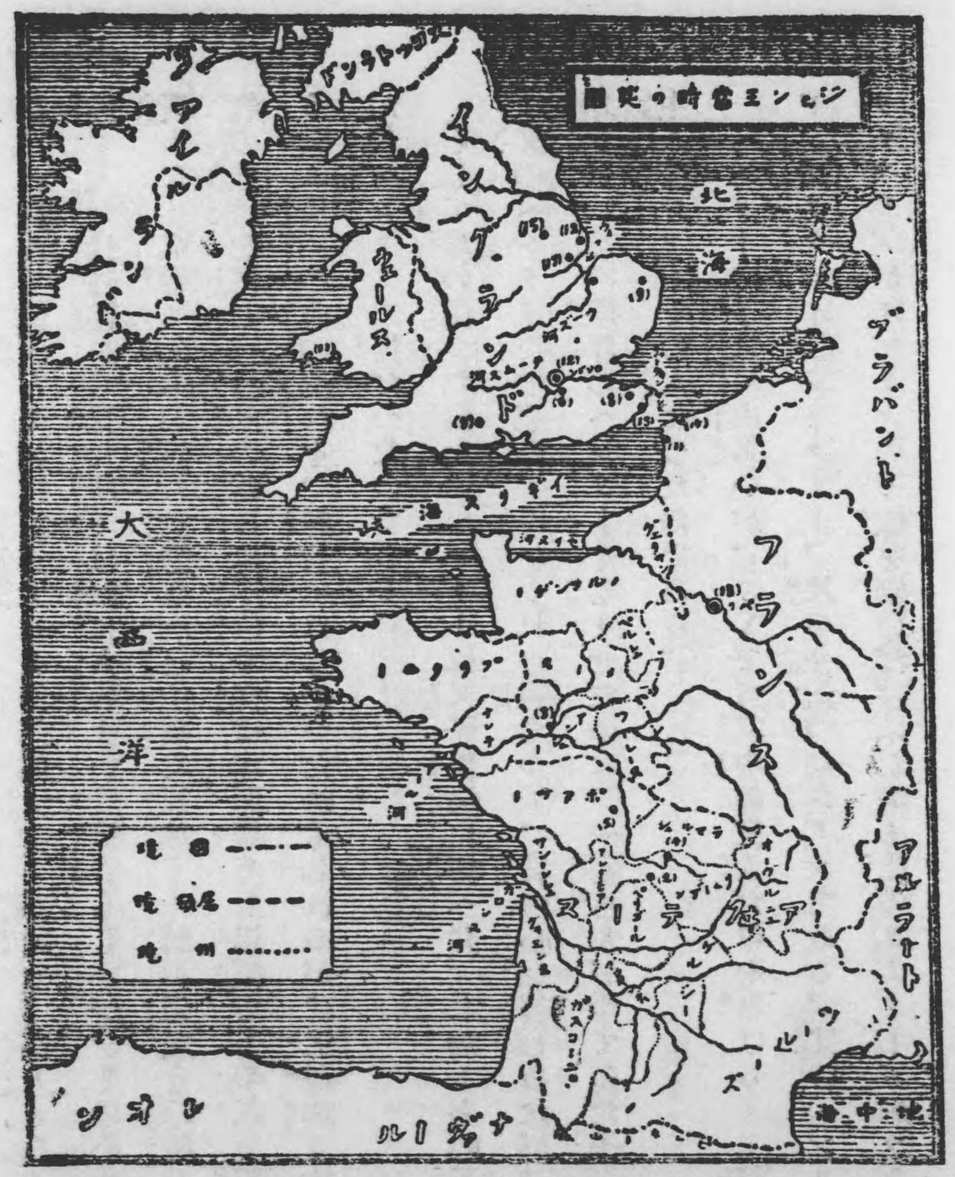
に即いた。これが本篇の最初に出て來る英國王ヘンリー二世で、プランタジェネット王家の祖先です。序に申しますが、プランタジェネットと云ふのは、英國邊で籐木にする「えにしだ」の木からとつた名で、ヘンリー二世の父ジェフリーがいつもその帽子に「えにしだ」の小枝をはさんでゐたからださうです。（「えにしだ」の種類は日本にもあります。黄色い豆のやうな花の咲く灌木です）

（一）プランタジェネット家の人々

イギリス王ヘンリー二世は、唯イングランドだけをその領土に有つ王ではなかつた。現在我々がフランスと呼んでゐる國土の三分の一以上までも、領土として有つてゐたのである。讀者諸君、まづフランスの地圖を廣げて、その北東の海岸にあるブーローニュの港の邊りから、フランスの南境――スペインとの間に連なるピレネーの山脈まで、眞直ぐ南に線を引いて見給へ。フランスの國土が、その線で東西二つに分たれるであらう。その線の東がフランス王の領土、線の西がイギリス王ヘンリー二世の領土であつたと、大體さう思つて頂けば、まづ間違ひがないのである。

何故かう云ふ事になつたか？　即ちヘンリー二世は、ノルマン王家の末であるヘンリー一世の女マティルダをその母に有ち、フランスのアンジュー伯であるジェフリーをその父としてゐる。從つて英國の王であると同時に、母の關係から、ノルマーディーを受嗣ぎ、父からはアンジューをはじめとして、メーン及びツーレーンの地を自然に受けついでゐたのであるが、更にアクキテーヌ公の女であるエリノアと結婚した爲に、ポアツー・サントンジュ、アングモア、ラ・マルシュ、リムーザン、ペリゴール、ガスコーニュ等――アクキテーヌ地方までも領したのである。（地圖參照）

「美しきプランタジェネット」と呼ばれた父ジェフリー伯爵の子として、ヘンリー二世なる人物は、史上にその名を轟かせてゐる最も恐しい民族の血を性來に受けてゐた。即ち、遠くその祖先を尋ねる時は、デーン人に苦められてゐた當時のフランス王を助けて、ロアール河の流域（即ちアンジュー地方）に廣大なる土地を與へられた、慓悍なブリトンの山男である。（九世紀の頃フランス王シャールがインジェルジェと云ふブリトン人にアンジューの地を與へたのがアンジュー伯の起りだと云ふ。その事を云つてゐるのです）實に野蠻な向ふ見ずの、その癖惜いほど惡慧い民族――最初は偉大なる戰士として聞え、



(1)ブーローニュ
(2)シャーリュ
(3)アンジェー
(4)リモージュ
(5)ポアクティエー
(6)リッチモンド
(7)サリスベリー
(8)カンタベリー
(9)ノーウィック
(10)バーグ
(11)ペンブローク
(12)ロンドン
(13)ドーヴァー
(14)カレー
(15)リンコルン
(16)リン
(17)スワンスヘッド
(18)パリ

後には進んで偉大なる指揮官偉大なる策師偉大なる姦雄を、幾人となく生み出した民族――一目外部から見た所では誠に人のよい愛嬌者らしいが、その心中を覗へば、情愛もなく名譽も知らぬ實に貪慾な利己主義な民族――神の宗教を嘲笑ひながら實は無智の迷信を信じ、目的の爲には手段を擇ばず罪惡でも謀叛でも平氣で犯す民族――かう云ふ民族の血の流れを、悉皆ではなかつたかもしれぬが、父親譲りに受けてゐたのが、ヘンリー二世だつたのである。

そして此の濁つた血を、ヘンリーは又子供達に傳へた。しかもその子供達はいづれも父のヘンリーを憎惡み、屢々これに逆らつて、父の心を苦しめたが、就中ひどい不孝を働いて、晩年のヘンリーを悲ませたのは、一番可愛がつてゐた子――即ち本篇の主人公ジョンその人だつたのである。

ヘンリーの子は可成多いが、こゝでは其中の三人だけを擧げる――獅子王リチャード、ブリタニイ公ジェフリー、及び今云つたジョンである。父のヘンリーが歿ると、リチャードがイギリスの王位を嗣いだ。（しかも此のリチャードがフランス王と腹を

合せて陰謀を企んだりしたのが餘計に父の死を速めてゐるのだ）長子ジェフリーは早く死んで、その後には幼いアーサーと云ふ子が殘つてゐるだけだつたのである。此のアーサーこそジョンと並んで本篇の主要な人物である。

さてリチャード一世は、十年の間王の位にあつたが、その間イギリスで暮したのは正味わづかに六箇月。勇武絶倫な軍人ではあつたが、王としては實に惡い王であつた。戰爭を遊戯と心得て、その遊戯を外國の國土の上で思ふ存分行はんが爲に、實に甚だしい税を課けて本國の國民を泣かした王であつた。しかもそれだけの税を納めたイギリスの民は何を貰つたか?! これも亦實にひどい惡政を王のリチャードから受けたのである。否惡政と云ふよりは、てんで政治が行はれなかつたと云つた方がよい位なもの。リチャードにとつては、イギリスの國――即ち自分の王である本國が、外國同樣に思はれたのであらう。

（編者曰）此のリチャードこそ、第三十字軍の花形役者です。さつき獅子王と譯しましたが、直譯すれば「獅子の心を有つた人」（ライオン・ハーテッド）と云ふ綽名を貰つた位――勇武絶倫と云ふか勇猛無比と云ふか――とにかく强い男だつたのでせう。後で述べる事との關係上、一應第三十字軍の事と、リ

チャードの半生とを話しておきます――そも〳〵十字軍と云ふのは、クリストの墳墓の地であるイエルサレムの聖地が、ローマ帝國の末に至り、ムハメッド教徒であるアラビア人の手に落ち、其頃はまだよかつたが、其後十一世紀の頃トルコ人が此地を取るに及び、宗教の大本山として年々各地から參拜に來るクリスト教徒の巡禮者を、甚しく苦しめるので、一つには之れを防ぐ爲、又一つにはクリスト教徒の面目の爲、聖地イエルサレムをトルコ人の手から奪ひ返さうと云ふのが、目的で起された戰役なのです。實に此の遠征は、前後七回二百年にわたり、しかも遂に目的を達せず、百万人の人命を徒らに失はせてしまつたのです。リチャードが出征した第三十字軍は、中でも大仕掛けな遠征で、第一十字軍の結果一時聖地をトルコ人の手から奪つて新しくイエルサレム王國と云ふ物を作つた――その王國を、エジプト人の首領サラディンなる者が滅ぼした事から起されたのです。遠征の主唱者はドイツ皇帝フリードリッヒ一世で、本篇中に現れて來るフランスのフィリップ二世とリチャード獅子王とが之に加つたのです。まづフリードリッヒ皇帝が一足先に小アジアに渡りましたがサレフ河で溺死してしまひ、その子のフリードリッヒが代つて南下し、アッカ市を圍んでゐる中に、之れも陣中に死んでしまふ。やがてリチャードはフィリップと共に海路小アジアの地に渡り、遂にアッカ市を攻め落しましたけれども、同時に兩王の間に不和を生じて、フィリップは歸國してしまふ。リチャードはそれより更に進んで、サラディンと戰つたが勝敗決せず、巡禮を苦しめぬ約束だけ結んで、翌年歸國の途についた。ところが、歸途海上で難破に逢ひ、仕方なく陸路變裝して英國に赴かうとする途中、前にアッカで喧嘩した事のあるオーストリア公の手に捕へられ、次いでドイツに引渡されて、十三ケ月の間幽囚されてゐた。しかも此留守にジョンが謀叛を起す。フィリップ二世はその機をうかゞつてノルマンヂーの地を奪はうとする――形勢甚だ危うかつたのです。しかし豪氣のリチャードは、歸國の後ジョンの罪を許すと、直ちに軍をあげてフランスに向ひ、大いにフィリップと戰つてゐる中、リムーザンに於て流れ矢に當り、遂に命を落したのです。

リチャードには外國であつたらうけれど、その十字軍に赴いてゐる間本國に殘つてゐたジョンにとつては、イギリスは決して外國ではなかつた。決してどうでもよい國ではなかつた。

一體此のジョンと云ふ人物は、惡慧く不道德な先祖の血を、最もよく受け繼いでゐる憎むべき男ではあつたが、同時に、同じプランタジェネット家の中で、此の男ほど腹の底からイギリス最負であつた男――イギリスの價値と云ふ物を眞によく知つてゐた男も、他には見る事が出來ないのである。勿論、その所行を見れば、大いに憎むべき男である。けれども、此の「愛國心」だけは、たとへ行ひは汚れてゐても、大いに認めてやらなければならぬ。此のジョン王こそイギリスに「何よりもイギリス自身の爲に起て!!　その爲には世界も忘れてしまへ」と云ふ敎へを吹き込んでくれた最初のイギリス王なのである。その敎へ方はイギリスに大迷惑を與へた敎へ方ではあつたがとにかく敎へたには違ひないのである。

（二）王位の爭ひ

フランスのリムーザンに於て、（隱れたる寶物がありと聞き）シアーリュの城を攻め圍んでゐた獅子王リチャードが矢傷の爲、陣中に死んだと云ふ報が傳ると、かねて謀叛を企てゐた弟のジョンは其の機をはづさず、イギリスの王位に登つてしまつた。

本來ジョンには此の權利はない。當時フランスに居たけれども、長兄ジェフリーの子供である少年アーサーが順序として、王位に登るのが至當である。しかしジョンは、その當時恰度よくイギリスにゐたのと、母のエリノアが味方だつたのとで、巧みに之れを奪ひ取つた。此の母は夫のヘンリー二世――ジョンからひどく裏切られた父のヘンリー同樣に、誰にもまして此の息子を可愛がつてゐたのである。

膝元のイングランドは、まづジョンを王に認めた。ノルマンヂーも亦領主に認めた。その次には、南フランスのアクキテーヌ――これはエリノアの所有であるから、勿論

すぐジョンの所有となる。然るに一方他のフランス地方――アンジュー、メーヌ、ツーレーヌの三州は、正しい後繼者アーサーを領主と仰ぎたい意向であり、フランス王フィリップ二世も、またその方の味方であつた。

しかし此のフィリップ二世は、何も正義の立場から義憤を起したわけではない。「國境を接する隣國には、ジョンのやうな物騷な男より、若い溫順しい一少年を、領主にしておいた方が、枕を高くして寢られる」と云ふ――多分その方の理由からであらう。

とにかく、アーサーの母親コンスタンスから折入つて賴みがあつた時、フィリップは正に義憤つた態度で、直ちにその依願を容れ、大使のシャティョンと云ふ人物を、イギリスなるジョンの許に遣はし、「王位を退け」と忠告させた。

『して若し予が聞き入れなんだら、どうなると申されるのか？』

これがジョンの問ひであつた。シャティョンは昂然と答へる――

『その時はどうも己むを得ませぬ。激しい血腥い戰爭でございます。戰爭によつて貴下を壓服へ、そして貴下がお拒みの退位を、武力を以ておさせ申しまする』

『よろしい。「戰爭來らば戰爭、血來らば血、武力來らば武力」——此の返事を確と抱いて、とつとフランスに歸るがよい。よいか、「とつと」とぢやぞ。其方が電光ほど速ければ、予の大砲は雷ほど激しい。忽ち其方の後を追つて、其方の足元に落ちるであらうぞ』

ジョンは嘘は言はなかつた。逆風に祟られたシャティヨンが、漸くフランスに歸り着いて、此の拒絶を主人の前に報告するかしない内に、ジョンは早くも大軍を擧げて、シャティヨンの脊後を追つてゐたのである。

大使シャティヨンが着いた時、アーサーとコンスタンスを左右に連れたフィリップ二世は、アンジエーの都市の城外に、兵を整へて控へてゐた。このアンジエーの都市と云ふのは、プランタジェネット家の產れた地であり、現にアンジューの首府である。此の都市の向背と云ふ物は大問題だつたのである。

ところが今やアンジエーの市民は「惡魔と深い海の間に挾まつた」人のやうな顏をして、いづれも眉をひそめてゐた。最初はアーサーをと思つたけれども、今ではアー

サーを選ぶ事もジョンを王と認める事も、どちらも躊躇ひはじめてゐたのだ。こゝで一つ選び方を誤り認め方を間違がつたなら、それこそ大變な事になる。アーサーを選ぶと云つてしまつてから、相手のジョンが勝つた場合——ジョンを王にと認めてから、アーサーの味方であるフィリップがジョンを打ち負した場合——いづれにしても復讐を受けて、滅ぼされるのは目に見えてゐる。

そこでアンジエーの市民は、狡猾ほどに大切をとり、兩軍のどちらに對つても、市の門を固く鎖してしまつた。そして王を選ぶこと——此の何よりも難しい仕事は、どちらの旗色がよいかと云ふ事が、瞭然解つて來るまでは、延期すことに定めたのである。

此の曖昧な態度を見て、アーサーの味方であるフィリップが眉をひそめたのは、無理もなかつた。此のフィリップの傍らに在つて、此の度のアーサーを助ける仕事の、相談相手となつてゐたのは、やはりフランスの諸侯の一人、リモージュの子爵に當る人である。實を云へば此の貴族は、左程の人物ではないのであるが、自分では餘程偉

いつもりで、尊大振つてゐる男であつた。本來プランタジェネット家と此の子爵との關係は、又少し變つたものであつて、他の人々とは全く別な因緣を有つた役者である。即ち、プランタジェネット家の先代――かのリチャード獅子王が、シャーリュ城内より放たれた矢の爲に命を落したと云ふ――その由緒あるシャーリュの城こそ、此の子爵の居城だつたのである。

誰が放つたとも分らぬ矢が偶然獅子王に當つたからと云つて、それが此の子爵の自慢になるとは、少々受け取れぬ話ではあるが、リモージュ子爵はそれ以來、何時も獅子の皮を肩に羽織つて、自分の誇りとしてゐるのであつた。現に今獅子王の甥に當るアーサーを目の前に置いて、親しげに語り掛けながらも、やはり此の獅子の外套を、之れ見よがしに身に着けてゐる。しかし一方から考へると、かう云ふ因緣があるだけに、却つてリモージュ子爵自身は、今かうして味方してゐるのは自分の度量が大いからだと、内心得意なのであらう――いかにも勿體ぶつた樣子で、快くアーサーに援助を約し、アーサーの母コンスタンスからお禮の言葉を受けるのであつた。「神も此の

自分のする事には、感心してをられるであらう」と云ひたげな氣取り方である。

さて、案外に頑固なアンジェー市の態度に業を煮やしたフィリップ二世が、此の上は威嚇しつけてでも、門を開けさせようとしてゐる時、馳せつけたのがシャティョンなのであつた。まづ、ジョンの返答を傳へると同時に、ジョンが既に大軍を發してイギリス海峽を打ち渡り、此のアンジェーの都市を襲つて、一揉みに揉み潰さうとしてゐる一部始終を物語り、猶その陣中には、母のエリノアばかりでなく、姪のブランシュまで引連れてゐる事、勇猛なるイギリスの義勇軍が後に從つてゐる事を、言葉せわしく言上する。ジョンの母親エリノアが、抑々此の度の不和を引き起さした發頭人であり、恐ろしい荒女神である事は、素より改めて云ふまでもあるまい。姪の婦人ブランシュと云ふのは、ジョンの妹のエリノア夫人と、カスティラ（イスパニアにあつた王國）王のアルフォンソとの間に出來た娘なのである。又イギリスの義勇軍とは、別に政府から費用は貰はず、自分達が本國に持つてゐる財産を賣つて軍資となし、その代りにフランスの戰場で大財産を拾つてやらうと云ふ、掠奪目的の野武士を云ふのだ。

果してその言の通り、フィリップがアンジェー市の城壁に對ひ、威嚇の大砲を布かせようとして、まだその準備が整はない内に、早くも到着したジョン王は、フランス側に使をやり、立會談判を申し込んで來た。しかし、最早別に談判の餘地はない。まづフィリップがアーサーの正當の權利を主張する——

『ジェフリーは君の一番上の兄だ。ここにをるのはジェフリーの子だ。イギリスの王に即く者はアーサーを措いて外にはない』

『さう云ふ君は誰の許しを受けて、左樣な法律を作り出し、何の權利があつて此の予に退位を命じなさるのだ？』

もと〳〵正當の理由のないジョンは、唯かう云ふばかりであつた。

『誰の許し?! 他でもない正義の神の許しだ。力を有つてをる人々の胸に、その力を働かして善事を行ふ事を敎へ給ふ正義の神から許された權利ぢや。正義が汚され傷けられた時は、默つてをるなとの神のお言葉ぢや。神はフィリップの義心を動かして、アーサーの守護を任じ給ふた。予は神の御委任によつて、君の不正つた行ひを責め、

そして神の御後援を受けて、君の惡行を懲すつもりだ』

これで談判は終る筈であつた。ところが猶も口汚なく激しい舌の戰爭が、婦人同志の間に始められ出した。一方にはジョンの母エリノアの舌、一方にはアーサーの母コンスタンスの舌……そして止むべき氣色も見えない。之れを見て例のリモージュ子爵——自らプランタジェネット全家の友人を以て任ずる子爵が、よせばよいのに飛び出して來た。『平和になされ、平和に!!』かう叫んで兩婦人の中に入る。

『よう!! 偉いぞ!!』

その時何者とも知れず、耳許でかう冷す者があつた——子爵はきつとその方を見る。すると一人の英人の顏——大膽さうな逞しい顏と、はたと面を合してしまつた。それはジョン軍の一指揮官ロバート・フォールコンブリッヂと云ふ人物。

此のフォールコンブリッヂこそ、リチャード獅子王の子であつた。（但し正妻の子でない爲、王子の待遇は受けてをらぬ）正しく父の氣性を享けて、戰鬪を好む事遊戯の如く、しかも眞のイギリス人として、父リチャードとは反對に、祖國を愛する深き

男である。さればこそ此の度の遠征に於て、ジョンから應援を賴まれると、その心は忽ち涌き立つた。「イギリスで所領が欲しい」などと云ふ慾心は一切忘れてしまひ、「騎士の扱ひを受けた」と云ふそれだけを無上の名譽として、勇んで軍中に加はつたのである。

『必ずや此の名譽に恥ぢぬだけの振舞をしてお目にかけよう』

と、フォールコンブリッヂは自分でも云つた。殊更に氣輕で粗つぽい野武士となつて出陣したのも、やはりフォールコンブリッヂ自身の嗜好から出た遣方であるが、此の氣紛れな嗜好の下には――無骨な野武士の扮裝の下には、火のやうな眞劍さが燃えてゐるのだ。そのフォールコンブリッヂの目に、リモージュ子爵の兩肩を蔽ふ獅子の毛皮が止つたから耐らない。亡き父の思出を傷ける奇怪千萬な此の外套を、まざ〳〵と見せられては我慢が出來ない。――思はず腹からの憎怨を籠めて、制止に出た子爵を嘲つたのである。

しかし當の子爵には、誰であるかも解らなかつた。

『何者だ?! 此奴は?!』子爵はむつとして聞き返す。

『子爵殿、此の手で閣下を捉まへさせて頂き、着てゐらつしやるその皮衣をこつちへ頂戴できさへしたら、その場で名をお明かししようと、待ち構へてゐる人間ですよ。いづれその生皮を鞣して差上げる。決して嘘は申しません。きつと御約束しましたぞ。お忘れあるな、子爵殿!!』

これを手始めにフォールコンブリッヂは、散々に子爵をこき下した。しまひにはジョン方の婦人連までが、一緒になつて調戯ひはじめる。

『さあ〳〵!!』――とフォールコンブリッヂは調子に乘つて叫んだ――『御覽なさい、御覽下さい!! 獅子の皮を被た驢馬とござい!! やい驢馬!! そんな毛皮は重たからう。第一分に過ぎてゐる。俺が今剝り取つてやるから……何も恐る事はない……皮がなくつて寒かつたら、もつと別のを着るがよいわ。もつと貴樣にちやんと似合つた皮を!!』(イソップの中に驢馬が獅子の皮を着て獸を脅し、しまひには ばれて笑はれる話がある。それを思ひ出して讀んで下さい)

リモージュ子爵はぶる〳〵と慄へるほどに腹を立てゝ、さつさと其の場から引込で

しまふ。婦人達は手を拍つて笑ふ。フィリップ二世は聲を枯らして、此の馬鹿騒ぎを靜まるやうに命じ、改めてジョンの返答を迫つた。

『不正の王位から退いて、武器を捨てる所存はないのか？』

『死んでも出來ん!!』

ジョンは斷然かう答へてから、今度はアーサーを呼び掛けて、「王位を讓れ」と交渉した。そして、「此の卑怯なフランス王の袖にすがつてゐるよりも、ずつと善いお禮が貰はれるぞ」と、代償の報酬をほのめかすのである。母（即ちアーサーには祖母）のエリノアも猫撫聲で、盛に年若いアーサーを說く。すると今度はアーサーの母コンスタンスが現れて、今エリノアの言つた事を、そのまゝ皮肉らしく眞似ながら、殊更にアーサーを赤坊扱ひにして——

『ねえ坊や。祖母ちやまの所へ持つていらつちやい。いゝ子だから祖母ちやまに王國を頂戴な。ね。その代りには李と櫻桃と、それから無花果を上げませう。ねえ、いゝ祖母ちやまでせう？』

かうして又もや婦人同士の舌の戰ひははじまつて、いつまで經つてもやみさうもない。フィリップは矢鱈に癇癪を起して、やうやくそれを止めさせると同時に、アンジエーの市民を呼び出して其の意見を聞く爲に、合圖の喇叭を吹き鳴させた。

やがて幾人かの市民の姿が城壁の上に現れる。ジョンとフィリップとは交るく、或ひは嚇し或ひは說きして、市の決心を定めさせようとした。それに對して市民の返答は——

『ジョン王でもアーサー樣でも、私共はどちらでも構ひませぬ。どちらでも强いお方の方へ從ふ事に致しませう』

そして幾ら詰問つても、同じ答ばかり繰り返すので、遂に兩軍は左右に分れ、夫々陣を整へて、試驗の戰爭を始める事になつた。

しかしその戰爭も結局は勝負つかずに終つた。小さい勝負はあつたけれども、全體を定めるやうな物ではない。しかしその極く小い勝を兩軍とも夫々主張した末、英佛二軍の傳令は、今一度城壁の下に現れ、市民の審判を迫つたのである。

市民は最初から熱心に――どちらへも贔負せず公平に――そして全局の立場から、兩軍の戰爭を注意してゐたが、此の時傳令の兵に向ひ（それに續いて現れた英佛兩王にも聞えるやうに）――

『私共の見ます所では、どちらにも勝負はないと存じます。定めろとおつしやつても定められません故、やはり市門はお開け致しませぬ』

此の返答を聞くとひとしく、喧嘩好きのフォールコンブリッヂは、すぐこんな事を憶ひ出した――往昔イェルサレムの地に於て、ユダヤ人がローマと爭つた時、ユダヤ人の首領であるギスカラのヨハネとシモン・バル・ギオラスとの二人が、かねて互に睨み合つてゐたにも拘らず、一時その舊怨を忘れ、一致してローマ軍に當つた事がある。（紀元一世紀の中頃ローマ皇帝ティツスが遂にイェルサレムを占領した、其時分に起つた話です）――

「此の名高い史上の例は、實によい我々の手本ではないか。よろしく我々兩軍も一時一致して目の前のアンジェー市を攻陷し、うるさい邪魔を取り拂つた上で、改めて雌雄を決したがよい」――フォールコンブリッヂはかう思つたのである。

『ずいぶん亂暴な相談ですが……』と、流石に自分でも斷りながら、フォールコンブリッヂは英佛二王に向つて、此の新意見を提供した。ところがジョンもフィリップも、思ひの外乘氣になつて此の「亂暴な相談」に、耳を傾けはじめたのである。事實兩王とも萬策が盡きて、どうせ何かしら荒療治をやらなければなるまいと思つてゐたからだ。

アンジェー市の運命は、もはや風前の燭火である。

（三）「私慾」の女神

ジョン、フィリップの兩人の王が、互ひに相軋轢ひながら、プランタジェネット家發祥の地であるアンジェーの都市を味方につけ、それによつて王位の爭ひを決しようとしてゐる間は、アンジェーの市民にとつては、至極やり方が容易であつた。唯軋轢の結局がつくのを、默つて待つてゐればよかつた。そして又さうやつてゐる事が一番

貰いやり方でもあつた。然るに今や思ひがけなくも、兩王はフォールコンブリッヂの「亂暴な」意見を採用げて、互ひの鋒先を打ち揃へ、遠慮なく市の門に向けようとしてゐる。慄いたのは市民である。さうなれば正しく一大事。アンジェー市の死活に關する大危機が迫つたと云はなければならぬ。

蒼くなつた市民は相談の上、一人の代表者を選び出して、兩王を說く事となつた。「一言申し上げたい」と云ふその代表者の聲を聞くと、兩軍も一時鳴りを靜める。

本來アンジェー市民の腹の底は、「アーサーかジョンか」に迷つてゐたのではない。「どちらが正當か」の選び方に躊躇つてゐたのではない。「フィリップの軍隊とジョンの軍隊」「フランスの兵力とイングランドの兵力」——この二つの間に迷つてゐたのだ。「フィリップにつくかジョンにつくか」が本當の問題なのであつて、アーサーなどはどうでもよいのだ。——利口者の市民代表は、よく此の事を知つてゐた。そして最初から「強い方に」——「強いと分つた其の方に」市を上げようと約束してゐた。此の態度は今も動かす事はできぬ。

けれどもこの態度をほんの一歩進めて、首をひねつて見る時は、そこに活路がないではない——それを代表者は提議したのである。即ちその提議なる物は、正義とか王位とかアーサーとか、左樣な物には全く關係なく、唯英軍と佛軍とに和睦して貰はうと云ふのであつた。フィリップ二世とジョン王との和平をはからうと云ふのであつた。

『少し考へて御覽なされませ。此方にはイギリス王の姪御樣であるブランシュ樣が見えてをられます。そして又彼方には、フランス國の皇太子であるルキ殿下がをられまする。これほど都合よくお似合のお方が、双方にお揃ひではござりませぬか?! 何故このお二方の御緣組みをお計り遊ばされませぬ?! お二方の御緣組みは、やがて兩家兩國の御緣組みではござりませぬか?! お二方が御仲睦じく榮へ行かれると申すことは、夫々世に稀れな御血統が一つに結ばれる事であり、英佛二國萬々歲の芽出度き基礎ではござりませぬか?! 銀の樣に美しい二つの流れは、かくして洋々と融け連り二つの岸は永久に、綠に潤ひ行くでありませうぞ』

これは正しく思ひ切つて厚顏無恥い申出でに違ひなかつた。說く詞こそ美しいが、

つまりはアーサーを除者として、唯ジョン王とフィリップ二世が甘い汁を吸ふ事となるのだ。しかし説く者はよく知つてゐた――「聽手が聽手だ」と云ふことを。「ジョンやフィリップ達のやうな――聽手自身厚顏無恥い者に對つては、遠慮は要らぬ」と云ふことを……。代表者の雄辯は滔々として、益々油が乘つてくるのであつた――

『御緣組みをお計りなされませ。此の市門に大砲をお向けなさるよりも、御緣組みの方が遙かに得策ぢや。さりながら、萬一此の事をお聽入れがなく、やはり御攻めになるとあらば、全く據處ございませぬ。たとへ殷々たる砲聲が天地を搖がしませうとも、耳を籍さざること怒濤も物かは、躊躇かざること獅子も物かは、動かざること山も物かは、冷然なること「死」も物かは――何物も及ばぬ決心を以て、都市を守つてお目にかけまする!!』

『よう、よう!!』と耐りかねて口を挿んだのは、血氣のフォールコンブリッヂであつた。好きな戰鬪が止めになりさうな意見は、聞いただけでも我慢ができない上に、ブランシュ姫は自分自身に貰ひたいつもりもあつたからである。

『よう、よう!! 大きな事を吐しをるぞ!! 「死」も「山」も「波」も輕蔑しをつたな!! 十三の小娘が犬ころの事を話しでもするやうな事もなげな調子で、百獸の王の名を出しをつたな!! 畜生!! こんなに腹の立つ大法螺は、今までに聞いた事がないわ!!』

しかし代表者は平氣であつた。彼れはフォールコンブリッヂのやうな人の耳に話しかけてゐるのではなかつた。相手はジョンやフィリップ達である。

果してまづエリノア夫人が、我子ジョンの方を見返つて、「承知してはどうか」と忠告しはじめたが、ふと見ると相手のフィリップも大分心が動いたと見えて、そつと四邊を見廻してから、何やら傍の人達と熱心に私語き出した樣子だ。邪魔になるアーサーとコンスタンスとは、此の時は其場にゐなかつたのである。

『兩殿下のお返答が願はしう存じます』

と、城壁の上では市民代表が、催促するやうに聲をかけた。

『ではまづイングランドの方から……』

フィリップは流石に躊躇つて、最初の返答をジョンに讓る。そこでジョンが思ひ切つて承諾の口をきり出した。結婚を承知した上に、花嫁ブランシュの嫁入り土産——即ち姪婿への引出物として、フランス内にあつたイギリス領の中、アンジュー、ツーレーヌ、メーヌ、ポアクティエー——此の四つをルキ皇太子へ——とりも直さずフランスへ割いて贈らうと云ふのである。

勿論舅のフィリップには異議のありやう筈がない。しかも當の若い男女——ルキ皇太子とブランシュ姫も、此の結婚を承知したので、萬事はとん〳〵と運んでしまひ、アンジェー市民は市門を開いた。

唯一つフィリップの心掛りは、（今此の場には居ないけれども）頼つてゐた自分に裏切られた母子——コンスタンスとアーサーとの事で、嘸自分を怨むだらうと思へば、さすがに心が咎めるのだつたが、ジョンはすぐそれを慰めて言つた——

『何、御心配の事はない。アーサーはブリタニイの侯爵とリッチモンドの伯爵に任じて遣はす事と致さう。勿論此のアンジェー市の領主にもしてやるのです。さすれば

左程の不平はありますまい。コンスタンス夫人の望む所を全部適へる事はできぬが、少くとも五月蠅く怨む事だけは、止めさせる事が出來ませうから』

そして二王は打ち連れだつて、夫々部下の者を引き具し、アンジェー市内に入つて行く。時を移さず正式に結婚の式を擧行つて、和睦の固めをする爲である。

唯一人城外に取り殘されたのは、不平滿々たるフォールコンブリッヂ——人間の心を左右する「私慾の女神」の強い力を、泌々と深く感じたのであらう、じつと思ひに沈むのであつた。噫、「私慾の力」——「私慾の女神」の力ほど、世にも恐ろしい物はない。人々から「信義の精神」を奪ひ、世の王達が「良心」によつて身につけた鎧を脱がしてしまふのは、實に此の私慾の力である。——フォールコンブリッヂは天を仰いで、幾度か嘆じもし憤りもした。但しその憤怨の原因は、唯こればかりではなかつたのであるが……。

さて兩國の和睦が成ると、今度は之れをアーサー母子に、とにかく傳へねばならない。そして、此の有難くない役目を仰せつかつてしまつたのは、サリスベリー（イングランド

（参照の地圖）の伯爵であつた。仕方なく命を受けて來て見ると、フィリップ王の義俠心とその兵力とに信頼して、安心した母子の者は、フランス王の離御殿で、靜に語り合つてゐる。

サリスベリー伯が恐る〳〵事の由を物語つた時、母コンスタンスの叫んだ聲は、此の世の物と思はれぬ程、烈しくも痛ましいものであつた——

『緣組みですつて?!　和睦ですつて?!　不義の血統と不義の血統とが結ばれたんですつて!!』

コンスタンスは、どうしても信じたくない樣子で鋭く伯爵の顏を見つめた。が、やがて相手の目の中から、それが眞實である事を讀むと、我破と我子アーサーの上に、悲い身を投げかけて、氣狂のやうに愛撫りながら、『可哀さうな年若き者よ』と、返らぬ嘆きを繰返へすのであつた。そして伯爵が途方に暮れて佇んでゐるのに氣がつくなり、柳眉を逆立てゝ罵しつた——

『去つて下さい!!　何を愚圖々々してをるのです?!　妾は妾たつた一人で、思ふ存分に悲しみたい!!』

『奥樣、御許し下さい。私は貴女樣をお連れするやうに……』

『かまひません!!　一人でさつさとお行きなさい!!　どうしたつて行つてやるものか。今の此の妾の悲みに敵ふ權力はありません!!』——そして何と思つたか、べたりと地上に座つてしまひ——『さあ、此處に妾と悲みとが、かうやつて嚴かに座つてゐます。之れが妾の玉座です。王達にさうお云ひなさい——此の前に來て跪坐けと!!』

伯爵には返す言葉もない。いよ〳〵兩王が式場から新郎新婦の一行を連れて、此の場に歸り來つた時、やはり其儘地上にゐたコンスタンスの罵り方は、惡魔のやうに凄じかつた。罵しり呪ふ叫びの次には、「此の度の和睦が立所に破れて再び血醒さい風が吹くやうに」との、恐ろしい神への祈禱も吐かれる。

例の出過者のリモージュ子は、よせばよいのに今度も亦、「まあまあ」と之れをなだめにかゝる。果して今度も恥を掻いた。即ち之れを見たコンスタンスは、猶の事我慢ができなくなつて、實に激しい罵りを浴びせ、殆ど剩す所なく、子爵をやつつけて

しまつたのである。

『何です、貴下は?! 強さうな方にばかりついて、勝ちさうな戰ひばかりする卑怯者の腰拔ではないか?! 氣取屋で法螺吹きの大白痴者の上、口先でばかり偉さうな事を云つて、何一つ行はない大嘘言者奴!!』

しかもまだ云ひ足りなかつたか、猶一層ひどい惡罵を送る——

『何です、その獅子の皮は?! よくまあ恥かしいとも思はず、そんな物が着られたものだ!! 勿體ないから脱いでおしまひ?! 貴下のその卑怯な手足には犢の皮が一番似合つてゐる。犢の皮をおつけなさい!!』

『何?!』とリモージュは眞紅になつて、見苦しいほどせき込んだ——

『を、女だから我慢するが、お、おのれ男であつたなら……!!』

『その卑怯な手足には、犢の皮が一番似合つてゐる』

すると此の時耳の傍で、今コンスタンスの云つた言葉を、そのまゝ冷かに繰返す者がある。「何!!」と見返る子爵の傍には、又しても例のフォールコンブリッヂが、憎

らしさうに立つてゐるのだ。

子爵はかッと逆上せて、何が何やら無茶苦茶になつた——

『だ、默れ惡黨奴!! 此の上吐せば生命はないぞ!!』

しかし相手は平然として、わざと言葉を引張りながら、もう一度それを繰返す——

『そのヲ——卑怯なア——手足にイは——犢の皮が——一ばーん——似合つてゐイる』

(四) イギリス王のイギリス

フォールコンブリッヂとリモージュ子とが、又しても喧嘩を始めたので、ジョン王は見兼ねて大聲に之れを制止ようとしてゐる時、新しく一人の人物が、王を訪ねて來た由が、家人の口から取次がれた——

『法王インノケント三世樣の使節パンドルフ殿がお見えにござりまする』

（編者曰）此處で一通りローマ法王と云ふ物を知つて置かないと、後の話が解りにくい。――紀元前四年にユダヤのベトレヘムに生れた大聖人イエス・クリストが、新に一つの宗教を開き、其身は謀叛人扱ひにされて十字架の上に死なれたけれども、徒弟達の献身的な布教によつて、その教八ヨーロッパ全土にひろまり、つひに今日のクリスト教となつた事は、改めて申すまでもないでありませう。ローマ帝國でも、最初は之れを迫害しましたが、紀元四世紀の初めローマの國教と定められました。勿論その僧侶の間には、最初は何の上下もなかつたが、次第に大僧正、僧正などの區別が出來、中にもローマ、コンスタンチノープル、アンチオキア、イエルサレム――此の四つの地にある教會、即ち四本山の大僧正は、大長老と云ふ名の下に、夫々その地方の教會や僧侶を監督し支配する事となつたのです。ところが四つの內後の二本山は、アラビア人の爲につぶされてしまひ、ローマとコンスタンチノープルだけが後に殘つて榮えたのですが、特にローマの大長老は、全教會の監督者とされてゐた上、代々偉物が續いた結果非常な威權をふるひました。殊に、ローマの大帝國が東と西との二つに分れ、やがてローマを都とした西ローマ帝國は滅んで、コンスタンチノープルを都とする東ローマ帝國だけが、僅に餘命を保つ樣になるとローマ大長老の勢は益々强い物となり、グレゴリオ一世と云ふ人の代から、正式に法王と呼ばれ出したのです。其後フランク王の助力を得て、東ローマ帝國とも緣を切り、（之からクリスト教はローマ正教とギリシヤ正教とに分れますが、ギリシヤ正教は殆ど振ひません。以下本書でクリスト教と云へばローマ正教の事と思つて下さい）又はじめて法王領――即ち法王の領地と云ふ物が出來、前に一寸述べたカロロ大帝は、法王の手から其頭に金の冠を授けられて「西ローマ皇帝」と名乘つた程です。やがてフランク王國が分れて、後のドイツとフランスが出來る。今度は其ドイツ王が、やはり法王から帝冠を受けて「神聖ローマ皇帝」となる。かうしてローマ法王は、代々の皇帝に冠を授ける權利まで握つてしまつたのですが、更にグレゴリオ七世の時には、政治上にも法王の權力を皇帝以上にしようと云ふ大それた

野心を起す樣になり、之より皇帝との爭が始まる。やがて、十字軍が起るに至つて、法王の勢力はいよ〳〵加はり、各國各地の教會の大僧正を任命する權利まで握つてしまつたのです。ジョン王の父ヘンリー二世も法王にはずいぶん苛められました。しかもジョンが即位する前年こゝに又一人の傑物がローマ法王の位に登りヨーロッパ列國の帝王を臣下の樣に左右した。之が本篇に現れてくるインノケント三世なのです。實に此人の時代に於て、法王の權力は絕頂に達したと云はれてゐる位。後第四十字軍を起したのも此人です。

當時インノケント三世は、ジョン王のした所行に對して、深く憤怒る所があつた。と云ふのは、少し前イギリスでの本山であるカンタベリー教會の大僧正ヒューバート・ウォルターと云ふ人が死んで、後釜を定める事となつた時、ジョンは法王の許可も待たず、勝手に教會の人達に命じて、自分の臣下となつてゐるノーウィックの僧正ジョン・ド・グレイを、教會の首長にさせたからである。勿論インノケント三世は之れを認めよう筈はない。別に、ステファン・ラントンと云ふ――イギリス王の臣下ではなく、法王の顧問役の一人として、直接法王廳に直屬てゐる僧侶を、カンタベリーの大僧正として、正式に任命したのである。ところがジョンは大膽にも、此のステファンがイングランドの地に上陸る事さへ禁止つた上、之れまでローマから直接來てゐた

臣下でない教會僧は悉くイギリスから放逐つて、その跡の僧庵は物もあらうに、軍隊の宿舍とする一方、僧達の所有となつてゐた領地も全て政府へ沒收げてしまつた。

さあ怒つたのは法王である。即座に威嚇の破門（キリスト教徒の中から除くこと）狀を持たせて、バンドルフを此處に派遣したのである。

『ローマ法王の名によつて、王が何故に命を拒まれたか、御返答を要求めに參りました』

バンドルフは傲然として云ふ。聞くより早く氣短かのジョンは、怒髮天をついて怒つた——

『法王の名が何とした?! 同じ地上に生きてをる人間が、神聖なる一國の王たる者に向つて、禮儀も守らず理不盡に、返答を命ずるとは何事である?! 歸つて此の通りを主人に云へ!! 否もう一つ云つて置かう。「他國は知らずイギリスに來て、イタリア人の僧侶共が勝手な稅（當時教會ではその地の住民から土地の上り高の十分の一を稅としておさめさせてゐました）をとり立てる事は、今後斷じて罷りならん」と——ジョン個人ではない——イギリスがさう云つたと法王に

告げい!! 天なる上帝の僕として——上帝御一人は別として、少くとも此の地上に於いては、朕は正しくイギリスの君主ぢや。イギリスはローマの屬國ではない。イギリス王のイギリスである。法王如きが彼れ是れと、喙を容るゝ所ではないわ!!』

（編者曰）こゝで作者クウチ氏は、特に圖外に小活字で次のやうな意味の註を入れてゐます——

『讀者諸君、忘れ給ふな。シェークスピアは、ジョンの口から叫ばせた此の言葉を以て、新教徒（プロテスタント）の國としてのイギリスの立場を明かにしてゐるのだ。善かれ惡かれ、「イギリス人のイギリス」と云ふのがジョンの主義ジョンの精神である。否、やがて此の作の精神であり、此の史劇の主眼點である、シェークスピアはジョンと云ふ人を、すいぶん暗く忌はしく事實通りに描き出してはゐるが、しかし唯それだけが文豪の眞意ではないのである』

と。新教徒（プロテスタント）と云ふのは、後年「宗教改革」の運動が起つて、腐敗した法王の下にある腐敗したクリスト教を改善し、新しい正しいクリスト教を作り上げようと云ふ企てが、名高いマルチン・ルーテル達から唱へ始められた時、之に與して法王と皇帝とに逆らつたドイツの新教徒につけられた名です。後新教は次第に勢力を得て、北ヨーロッパは大部分プロテスタントの國となりました。英國も有名なエリザベス女皇の時に、新教を以て國教と定められ、しかもその少し前には、英國教會と云ふ物が出來て、英國のクリスト教は、完全に法王の手から獨立し、ジョン王の理想は果されたのです。そして、忘れてはならない事には、此エリザベス女皇の御代——イギリスあつて以來の黃金時代と云れた御代に、わがシェークスピアが出現してゐるのです。

此の思ひ切つた反抗の言葉に、驚いたのはフィリップ二世で——

『おい君、イギリスの兄弟!! 不敬な言を……』

と制止にかゝる。ジョンはびくともしなかつた——

『不敬? 何が不敬です?! フランス王たる君をはじめ、クリスト教國の王と云ふ王は、悉くあの出過者の坊主——ローマの法王とやらの爲に、すつかり眼を晦まされてゐるのだ。あの——神聖な天帝の赦罪狀を金次第で賣る坊主の爲に……。君等はそれでよいかも知れぬ。あの詐欺師の手品使ひから、甘く金を捲き上げられて、それで滿足してござるかもしれぬ。しかしかく云ふジョン一人は、どこまでもそれと戰つて見せる。法王の味方だと云ふ者があつたら、何時でも敵對になつてやる』

(編者曰) 赦罪狀と云ふのは、法王の手から人々に授けた「現世の罪が消えたと云ふ事を證據立てゝやる書付」を云ふ。これは本來「人間は皆罪の子である。唯眞に心から之を悟つて悔い改めた者だけが死後天國に昇れる」と云ふクリスト教の立派な教から出てゐたのであるが、後には段々にそれが墮落して、法王や教會に澤山の寄附をしさへすれば、どん〳〵貰へる事となり、つまり金で買へる「天國の入場券」となつてしまつたのです。前に述べた宗教改革の火の手も、之れが激しくなつたのが第一の原因で起つたのです。何しろ法王はクリストの代理者となつてゐるから好きな眞似ができたのです。

かうなつてはもう如何する事もできぬ。バンドルフは法王の名によつて、世にも恐しき破門を宣告し——ジョンの名をクリスト教徒の內から除く事を申渡すと同時に、ジョンに叛くイギリスの民は、神へ忠誠を盡す者として祝福へられるばかりでなく、「汚れた憎むべきジョンの生命を、暗殺によつて奪る者があれば、神に仕へる聖者として、永久に尊敬ばれるであらうぞ」と、恐しい約束まで提出された。その凄じい宣告文を夢中になつて叫び直したのは、アーサーの母コンスタンスである。

バンドルフは次にフィリップに向ひ、「法王の呪ひが恐しくば、此の場でジョンと交際を絶ち、他のクリスト教國の王と、共々に一大同盟軍を起して、異教徒ジョンを討たれよ」と勸告めた。

折角和睦したばかりの所へ、かう云ふ事が起つたので、フィリップは實に困つてしまつた。ジョンとの和睦も破りたくないが、法王の破門も恐ろしい。狂氣のやうに叫び騒ぐ婦人達に取り卷かれながら、フランス王フィリップ二世は、氣味惡いほど沈着き拂つてじつと見てゐるバンドルフと、口の端に嘲笑を浮べて、默つて持つてゐるジ

ョン王と――此の二つの間に挾まつて、暫時は何とも云ひ様のない困しい顔をしてゐるのであつた。仕方なくまづバンドルフに向つて、「ジョンとの絶交は待つてくれ、しかし法王にはむかひはせぬ」と、蟲のよい事を頼んで見たが、勿論きかれよう筈はない。相手はやはり面憎いほど、落着き拂つた聲で答へる――

『ジョン王と交りを續けられるとあらば、即ち信仰をお破りなのぢや。法王とジョンと其の双方に味方をなさらうとて、それは出來ませぬ』

そして遂に――最初より解り切つた事ではあるが――フィリップはバンドルフの言に從つた。かくなる以上新婚の二人――ルキとブランシュとの夫婦中に、間隙が入るのは解り切つてゐたが、やはりバンドルフの言に從つた。ジョン王は、かねてから覺悟してゐたと見え、別段騒ぐ様子もなく――

『フランスよ。明日にも後悔おさせしますぞ』

と短い嘲笑を送つた後、直に傍のフォールコンブリッヂを見返り――

『全軍を取り纒めてくれ給へ』

もとよりフォールコンブリッヂは、二つ返事で引受ける。

さて、かうして起つた英佛戰爭に於て、少くともフォールコンブリッヂだけは、必置きなく望みを晴した。何時何處の戰場で出遇つたか、――どんな名乘りを上げて闘つたか――それは全く解らないけれども、とにかくフォールコンブリッヂは、父の敵リモージュ子の首級を、冷然と提げて凱旋した。

『何でも暑い〳〵日ぢやつたよ』

唯かう云つたばかりである。

（五）狂へる母

フォールコンブリッヂほどではないが、ジョンも亦幾分思を晴らした。即ち少年アーサーを囚虜にする事ができたのである。アーサーは直ちにヒューバート・ド・バーグと云ふジョンの侍從の手に渡され、歸國の後はその城で、哀れな幽囚者として、豎

視される事となつてしまつた。

そして一方戰爭に敗れたフランス軍の陣營では、早晩死の運命が此の少年の上に下る事を、疑ふ者はなかつたのであるが、中にも哀れを止めたのは、アーサーの母コンスタンスである。唯々愛兒の名を泣き叫んで、如何なる慰めにも耳を籍さず、狂ひ悲しむばかりであつた。今では生きてゐるとは名のみで、絶望しきつたその靈魂にとつては、なまじひ生きてゐる肉體は、一刻も早く拔け出したい墓穴のやうな物であつたのであらう。否、拔け出すにも拔け出し得ない——そして滅びざる靈魂を何時までも無慈悲に閉ぢ込めて置く——牢獄のやうにも思はれたのであらう。死を叫び死を要めるコンスタンスの聲は、聞いてをられないほどであつた。遂に人々は此の婦人が全く狂人となつたものと、思ひ込むやうになつてしまつたが、するとコンスタンスは眞劍になつて、「さうではない」と主張り出す——

『いゝえ、妾は決して狂人ではない。狂人なら我子を忘れるとか、ぼゝ人形を我子にしてそれで氣を紛らすとか、そんな風にでもなりさうなもの。妾は狂人ではありま

せん。狂人よりもつと不幸者です』

そして亂れ果てた頭髪を搔き上げ、矢庭にバンドルフの手にすがる——

『おゝ、上人樣、妾は死んでからあのアーサーと天國で逢ふ事ができませうか？あの子はきつと悲みや苦勞で、あの美しい顏も形も、すつかり崩れてしまふことでせう。心も體も瘠せ衰へて、幽鬼のやうに恐しい形相と變つてしまふでせう。そしてその儘であの世へ行き最後の審判（死んだ人は天に昇つて、神の神聖な裁判所で、此世の罪の裁判を受け、天國へ行くか地獄におちるかを定められると云ふのがクリスト教の思想で、之を最後の審判と云ふのです）を受けるのです。きつとさうに違ひありません。さうなればあの子が天に昇つて、天の審判所で妾と出逢つても、妾にはあの子だと云ふ事が、きつと解らずにしまひませう。あの美しい子のアーサーとは、妾は死んでも逢へないのです。おゝ、決して〳〵逢へないのです!!』

フィリップとバンドルフは叱るやうに、「もつと心を大く有つて、悲しみ過ざるな」とさとしかける。すると、コンスタンスは屹となつて、まづ僧のバンドルフを指さし

——

『子を一人も有つた事のない僧侶に何が解ります!!』

そして今度はフィリップ二世に向つた——

『悲みです!! ゐなくなつたアーサーの代りに妾が貰つたのは悲みです。悲みがあの子の寢床に眠り、妾の眼の前を歩き廻り、あの子が云つたと同じやうな言葉を、妾の耳にさゝやいてくれる。だから妾は「悲み」が好き——「悲む」のが大好きなのです。貴王なんぞに用はありません!! 貴王が若し今の此の妾と同じやうな目にお逢ひなのだつたら、妾は貴王より、ずつと〳〵よく、眞の「慰め方」をして見せます』

云ひ終るとコンスタンスは、王とパンドルフを尻目にもかけず、さつさと居間へ引取らうとする。しかしいよ〳〵歩き出して見ると、又しても涙が込み上げて來て、思はず叫びを上げるのであつた——

『おゝ、主よ。わが子——美しきわが子——わがアーサーの上に……』

皇太子ルキとパンドルフとは、じつと去り行くコンスタンスを見送り、夫々思ひに沈んでゐた。が、ルキはまだ一青年で、心も考へも淺墓であり、一方僧服のパンドルフの方は、物事の裏の裏まで、見透すやうな洞察力を有ち、殊に今の場合には、實に僧侶にあるまじいほどの抜目のない思慮に耽つてをるのであつた。やがてパンドルフは誰にともなく、呟やくよりは高い聲で云ふ——

『病氣がいよ〳〵癒る前には——さうだ、いよ〳〵癒り出す瞬時が來ると、却つて一番酷い發作が起ると云ふ話ぢやが……考へて見れば妙なものぢや。ジョンがアーサーを囚虜にして、立派に勝つたと思つてゐる——さ、その囚虜が、ジョンの大敗北の源因とならうとは……殿下、あなたはアーサーの囚虜れたのを、可哀想とお思ひでありませうな?』

『えゝ、心から可哀想だと。恰度あのジョン王が喜んでゐるのと同じ位に』

『いや、貴君はまだお若くゐらつしやる。まづお聽きなされ。ジョンはアーサー殿を捕へた。けれどもあの青年が此の世に生きてをる以上、ジョンの心は安まりはしませぬ。いづれ殺される日が參らう』

『だが、アーサーが殺されたからとて、それが私に何になります?』

『さ、そこぢや。若しアーサー殿が死なれればですな。貴君はブラシュ樣の婿君として、アーサー殿がなした通りの要求をジョンになさる事ができる。唯夫れあるのみですよ。その曉きには世を擧げて、貴君の御味方に參じませうぞ。「罪なきアーサーを殺した」と云ふ――これほど世の人々の心を慄えさせ怒らせる物はありませぬ。これだけで人心はジョンを離れ、少しでも變つた事があれば、「惡王ジョンの所行を怒る天の敎示だ」と信ずることは、今から目に見えてをります』

『だが、ジョンは殺しますまい。たゞ幽囚めて置くだけにしませう』

『唯貴君がその足を一寸お擧げなさりさへすれば、假令今では殺さぬつもりでも、それを聞いただけで殺すやうになりますする。殺したと解れば其の日からイギリスの國內に謀叛が起る。いや、ばかりではありません。ジョンについてをるフォールコンブリッヂ――あの男は今でさへ敎會を荒し慈善團體を辱しめて、イギリス中の怨みを買つてゐる。今です。今若し十二人のフランス人が彼地に押渡つたならば、一萬人のイギリス人を味方につける事ができませう。如何です、此の事を唯今からお父王に御相

談しましては？』

此の誘惑は强かつた。ルキの心はすつかり動いた。

『よろしい。早速二人揃つて父の所へ行きませう。强い理由からは强い行爲が生れる。それだけ立派な理由があれば、父も必ず賛成しませう』

（六）冷めた鐵

バンドルフの言葉は當つてゐた。アーサーが此の世に生きてゐる以上、ジョンの心は安まらなかつた。フォールコンブリッヂをイギリスにやるとすぐ、ジョンはアーサーを預かつてゐるヒューバート・ド・バーグを呼び寄せた。さすがにアーサーを殺せとは、明瞭に云ひ出さうとはせず、最初はまづヒューバートが何時も云ふ「ジョン王の爲なら」と云ふ言葉を、それとなく念を押すやうに、何や彼やと話してから、扨て幾分改まつて――

『實は是非一つ君の力を借りたい事があるのぢやが、これは一寸話す時機を選ばねばならぬ事ぢやから、いつかまた他の日に云ふことにしよう。どうも今日の此の席は、あまり人出入が激しすぎる。いつそこれが夜でもあつて、しかも話を聞く相手の人物が、何から何まで呑込んでをり、眼で見ずともわかり耳で聞かずとも合點き、そして口には出さずして承知の返答をしてくれるやうな――さう云ふ人物であつたならばその時は又別……いや、朕は君を股肱とも親友とも思つてをり、又逆に君からも非常に愛して貰つてゐる事――それはもとより云ふまでもないが……』

『陛下の御命令とあらば、假令生命を失ひますやうな事でも、臣はきつとやり遂げまするものを!!』

『ヒューバート、それを此の朕が知らいでか』

ジョンは小聲でかう云ひながら、ちらと眼を肩越しに脊後へそらせて、抜目ない母のエリノア夫人が逸早く隅の方へ連れて行つてゐた少年アーサーの方を見た。（アーサーも圖に歸るまでは、ジョンの陣中にゐるのです）

『君、一寸あれに居る少年を見給へ。あれを君は何と思ふ？　あれこそ朕の行手に横はる危險至極な毒蛇なのぢや。朕の行く先き行く先きの邪魔をするのがあの蛇なのぢや。どうぢや、解つたかな？　君はあれを預かつてゐる人ぢや』

『左樣なれば歸國後は心を碎いて、陛下の御邪魔をされませぬやう、ずいぶん注意して監視りませうで……』

『死ぢや』

ジョンは遂に此の言葉を、半ば獨言のやうに呟いた。

『陛下!!　さすればあの……?!』

ヒューバートはやうやく解りかけて來た。

『墓ぢや』

とジョンは折返して呟く。しかし相手を見ようともせず、やはりうつむいた儘であつた。

『解りました。生かしては置きますまい』

『もうよい、もうよい』――ジョンは聞えなかつた風をして、あはてゝ其場を紛らしながら――『ヒューバート、朕は御身が好きぢや。よし、よし。此の上は何も云はぬ事にしてさあ歸國らう。……樂しくイングランドの本國へ歸らう!!』

しかしイギリスに歸つてから、ヒューバートは何故かアーサーを矢張殺さずに幽囚めて置いた。するとジョンの命令も、段々露骨になつたばかりか、今度は處刑法まで命じて來た。即ちあらう事が慘しくも、赤燃た鐵を兩の眼に當てゝ、燒き潰せと云ふのである。これには雇はれて來た刑吏(實際にその刑を行ふ身分の低い小者)の一人さへ思はず顏をそむけた程であつた。

いよ〳〵恐ろしい處刑の日は來た。アラス織の幕の外に刑吏の者共を控へさせて、「鐵を燒いて置け」と命じてから、ヒューバート・ド・バーグは思ひ切つてアーサーの許に進んで行つたが、さすがに此の嫌忌な仕事の事を思ふと、死ぬやうに心が暗くなるのであつた。

それは仕事が慘虐いと云ふ、唯それればかりなのではない。優しく美しく天使の樣な幽囚者の資性は、いつしかヒューバートの心を惹きつけて、今では、アーサーを心から愛するやうになつてゐたからである。「何人にも害を與へようとは思はず、又何人かゞ自分に對して害を與へるかもしれぬなどとは、夢にも思つた事のない」素直な少年の心に觸れては、むくつけきヒューバート自身の心も、春の風に觸れた氷のやうに、和ぎ出さずにはゐられなかつたのである。

ふと顏を上げたアーサーは、眼ざとくも、入つて來たヒューバートの顏が、苦しげに蒼ざめてゐるのを見て、心配さうに尋ねかける――

『何故そんなに悲しさうにしてゐなさるのです。此處にゐる私自身を除けば、悲しむ人はない筈だと、さう思つてゐますのに。私も他には悲しみはない。たゞ此の牢屋から出たいだけ。あゝ若し此處から出られたら。私は羊飼の牧童になる。さうすればどんなに日が長くとも、一日中樂しく暮しますがなあ。何此處だつていゝんです。此處だつて樂しく暮せるのですが、唯叔父さんが可恐いものだから。それさへなければ

此處だつて……ですけれど、一體私がジェフリーの子に――叔父さんの兄の子に生れたと云ふのは、此の私が惡いのでせうか？　ヒューバートさん、私は貴君の子に生れたかつた。そしたら貴君も此の私が可愛くなつたにちがひないから』

此の罪のない無邪氣な言葉――その言葉の一つ一つが、ヒューバートには拷問で苦しめられるよりも辛かつた。此の上こんな言葉を聞かされてゐては、折角王の爲と思つて立てた決心が駄目になつてしまふ。かう思つたから心を鬼にして、いきなり忌はしい宣告文を引き出し、それをアーサーの手に渡すと、耐へきれず流れ出る涙を、隱すやうに顏をそむけた。

『何?!　私の眼を燒き潰す?!　それを貴君が……?!　おゝ、貴君は鬼なのですか?!血も涙もないのですか?!　ヒューバートさん、貴君が頭痛で苦しんだ時、私は私の手帛で――それも私の持つてゐる中で一番上等な分を出して――貴君の頭を結へてあげた。その晩は到頭夜半まで貴君の傍に附き添つて、看護つてあげたではありませんか?!

「御機嫌とりにあんな事をしたのだ」とお思ひなら仕方ありませんけれど、貴君

は本當に此の兩つの眼を――一度だつて貴君を睨んだ事もない――これからも睨む筈のない此の眼を潰す心なのですか？』

『潰さなければなりませぬ。私は王に誓約つてしまつた』

ヒューバートは唸るやうな聲で呟やくと、トンと合圖の足踏みをして、刑吏の者共を呼び入れる。その人々の手に持たれた太い綱と赤く燒けた鐵棒、一目見るよりアーサーは我を忘れて駈け寄り樣、ヒューバートにかじりついた。

『助けて!!　ヒューバート!!　助けて!!』

『鐵は俺に渡して置いて、此の人を先に縛つてしまへ』

ヒューバートはわざと聲を荒らげて命ずる。

『いけません!!　いけません!!　もう騷ぎ立てはしませんから……。石のやうに溫順しくしてゐますから……。どうかどうか、私を縛らせだけしないで下さい!!　ヒューバート、お願ひです!!　みんなを彼方へやつて下さい!!　それだけ肯いて下されば羊のやうに靜にします。泣きもしません。慄へもしません。一言だつて云ひもしませ

ん。あの人達さへゐなくなれば、貴君からなら其の後で、何樣な刑罰でもきつと受けます!!』

『往け』――ヒューバートは遂に云つた――『俺と此の子だけを殘して、みんな此室から出て往つてくれ』

刑吏共はホッとした顏をして、その儘室外へ立ち去つた。あんな恐ろしい事をするのは、みんなだつて嫌なのである。ヒューバートは改めてアーサーを見た――

『さあ、覺悟はよろしいか』

しかしアーサーは拜むやうに、さう云ふヒューバートの前に跪坐いた――

『ヒューバートさん。どうしてもやられるなら舌を切つて下さい!! 舌の方にして眼は許して下さい!! おゝどうぞ此の眼だけは!!』

かうやつて懇願つてゐる間に、ヒューバートが手の內に握つてゐた鐵は、いつかつめたく冷めてしまつた。此の慘虐しい刑罰は、もはや出來なくなつてしまつた。

冷めた鐵は熱すればよいけれども、覺醒た心はどうとも出來ぬ。ジョンがそれと知

れば身の破滅ではあるが、かうなつてはその危險を犯しても、アーサーを助けるより外はない。アーサーは死んだと云ひ觸してジョンの耳を欺くの外はない。――決心を定めたヒューバートは、その場から少年の手を引いて、人目につかぬ所へ隱してしまつた。

(七) 少年の生死

幽囚者アーサーの悲しい運命を豫想してゐたのは、フランス軍の人達ばかりではなかつた。イギリス國內でも之れについて、ひそかに取沙汰が行はれ、ジョン王の素振りを注意する者が、相當に多かつたのである。

その時も時、ジョンは歸國後暫時たつと、前に一度擧行つた即位式を、改めて擧げ直すと云ふ布告を出したので、「愈々それではアーサーを殺して一人天下となつたからではないか」と思はないわけには行かなくなつた。

さて愈々その即位式の日。列席した多くの貴族達――中でもペンブローク伯やサリスベリー伯は、嫌に御世辭や追從を王に對つて卷き散らし、「實に今日の此の御即位式は、それでなくてさへ輝かしい黄金の上に、更に黄金をかけたやうなものだ」とか「百合の名花に彩色である」とか「スミレに香りを加へるものだ」とか、「白日に篝火を焚き添へて、太陽の光りを增した」とか――種々樣々な美い辭句で、ジョンをおだてあげるのであつた。さりながらかう云ふ辭句の蔭には、いづれも針が隱されてゐたので、儀式の間にも時機さへあれば、「アーサーは？　アーサーは？」と云ふ低い私語が、同じ貴族達の間で取交されたのである。

さて、愈々芽出度く玉座について、得意滿面に溢れたジョンは、並み居る貴族達を見渡し、「今までのイギリスの政治に就いて改善めたいと思ふ點があれば、遠慮なく申し出でられよ」と、式の如く意見を問はれる。するとかねて打ち合せてでもあつたのか、ペンブローク伯が大膽にも、まづアーサーの赦免を願ひ出た――

『幽囚となつてをられるアーサー殿を自由の身となされますやう、一同に代つて御願ひ致しまする』

『よろしい、早速さう致さう』

案外にもジョンは快くその願ひを聞き屆けた。と云ふ理由は外でもない――「そのアーサーは昨夜の間に、冷い屍となつてゐようぞ」と心中ひそかに微笑んだからだ。

すると、恰度此の時ヒューバートが、遲ればせに此の席に入つて來る。と見てジョンは待ちかねたやうに、之れを傍らに招き寄せた。そして何か私語き合ふ一方、貴族共も眼と眼を見合せて、疑ひ深く囁きはじめる……やがて元の座に直つた王は一段と聲を高くして云つた――

『貴族諸卿、折角の諸卿の御希望であつたが、遺憾ながら果すことが出來ぬやうになつた。今此の男の報告によると、アーサーは昨夜歿つたさうぢや』

暫時は水を打つたやうに、氣味惡い沈默が續けられる。やがてそれを破つたのは、サリスベリー伯爵であつた――

『いや全くあの病氣では、迚も助られまいと思つてをりました』

何だか意味ありげな一言である。すると次にはペンブローク伯が――

『左樣々々、何でも病氣となられる前から、御自身では承知せられずに、死にかけてをられたやうに承はつた。之れは是非事情を伺はせて頂かう』

ジョンは不快さうに眉をひそめる――

『何が故にそのやうに、各位は朕の顏を睨まれるのぢや？　朕が運命に手を添へてアーサーを殺したとでも云はるゝのかな?!　いやさ、生死を司る力が朕にあるとでも申さるゝのか?!』

『白々しい事を仰せられるな』

サリスベリー伯が大膽に突つ込むと、ペンブローク伯もその尾について、同じ嘲笑を繰返し、怒り切つた貴族一同は、席を蹴立てゝ退場する。一方ジョン自身も心の中で、自分の命じた慘しい所行を、悔む――とまでは行かないにしても、さすがに厭はしく思ひ出してゐた。

ばかりではない、やがて一層重大な事件が、ジョンの耳に傳はつて來た。フランス

は精鋭なる大軍を整へて、將にイギリスに侵入せんとしてゐる――否既にその先發隊は、ルキ皇太子の指揮の下に、國内に上陸したと云ふのである。同時に自身の母エリノアが病の床に仆れたとの報告と、哀れなる他の母コンスタンスの狂る魂も永久に天に昇つたとの通知と――此の二つもジョンの手許に届いた。

如何にしてフランスの大軍を防がう？　頼みに思ふ貴族共は、自分を深く怨んでゐる、唯一の力であるフォールコンブリッヂ――あの男にも困つたものだ。平生から無茶苦茶な税を負はせて僧侶苛めばかりやつてをるから、猶の事そんな事が持上るのだが――フォールコンブリッヂが歸つて來ての報告によると、今やイギリス全國が不安の雲に蔽ひ鎖され、人心は唯何とはなしに、戰々競々として亂れ騷ぎ――それをよい事に豫言者共が、「天の誡め」の「神の罰」のと、怪しい豫言を國中に云ひ觸して廻つてゐると云ふ……ジョンは益々苦い顏をした。

全くの所此の報告は、決して法螺でも大袈裟でもなかつた。ジョンが法王の破門を受けて以來、此の國は火が消えたやうであつた。破門を受けたイギリスは、正式に神

を禮拜む事の、できない國になつてしまつたのである。

（編者曰）　クリスト教の破門には二通りあります。唯其人一人だけが破門される場合と、其人の領地全部人民全部までが一緒に破門される場合と、大體此の二つなのですが、ジョンのやられたのは「インターディクト」と云つて、後の酷い方なのです。ですからイギリス國民全部が、クリスト教徒の扱ひを受けられなくなつたのです。しかも中世――即ちローマ正教の盛だつた當時は、迷信と云つてよいほど宗教心の強い時代――宗教の儀式のやかましい時代で、七つの儀式（サクラメント）と云ふ物があり、人の一生は何から何まで教會――即ち僧侶の御厄介にならなければならなかつたのです。儀式七つを一々説明するのは略しますが、クリスト教徒となる爲の洗禮、パンと葡萄酒を食べてクリストの死を記念する聖餐、死んで行く人に油をぬつてやる終油式、夫婦の愛を神に誓ふ結婚式などが、その中にふくまれてゐます。葬式も勿論僧侶の手によらねばならず、しかもみんな土葬です。

これだけの事と、「當時のクリスト教は（前に述べたやうに）全くローマ法王のクリスト教で法王あつての教會法王あつての僧侶だつた」事とを呑み込んで置かれゝば、法王から破門された中世の人民が（信仰心が厚かつただけに）どんなに困つたかを書いてゐる次の話がよく解りませう。

教會の戸は固く閉ざされて、朝な夕な響いた鐘の音も、昨日の夢となつてしまふ。自分々々が簡單な洗禮の式をやるだけで、儀式一つ擧行つては貰へぬ。年頃になつた若い男女も正式の結婚をする事ができず、臨終の床に臥した者は、「赦罪」も受けず「慰め」もなく、その儘死んで行かねばならず……否猶一層ひどい事には、死んだ者

を葬る方法がない爲に、死骸は大道に横はつた儘蛆の湧くに委せた物が多く、教會の墓地の周圍には、さすがに僧の遺骸だけが、鉛の棺に納められて、空しく積み重ねられてある。呪詛を叫ぶ僧の聲と、「天災」を説く豫言者共の聲とを、廣場の辻々に聞く外には、説教らしい物もきかれぬ。――これが當時のイギリスなのであつた。

やがて例のヒューバートも、報告を持つて入つて來たが、やはりフォールコンブリッヂと似たり寄つたりの、面白くない報告であつた。――何處へ行つても「アーサー?!　アーサー?!」とアーサーの事ばかり言つてをつて、現に貴族共はアーサーの墓を見付る爲に出發し、一般の人民もその死に方を疑ひ出してゐると云ふのである。恰度その時ジョン王は、母エリノアの世を去つた事を、一人嘆いてゐる時であつたから、餘計に腹が立つて來た。

『アーサーの死?!　さう云ふお前が殺したんではないか』

『左樣、陛下のお希望で』とヒューバートも負けてはゐない。

『ふむ。早呑込みの性急者を臣下にもつた王は災難だな』

『こゝに、陛下御自身でお書きになつた死刑の命令書がございます』

王が罪を逃れようとするのを見て、「御卑怯な」と言はんばかりに、かうヒューバートは冷かに答へる。「アーサーが生きかへつてくれさへしたら」と、今では心からそればかり思ひつゞけてゐたジョンは、この一言に赫と逆上せた——

『えゝ氣の利かぬ馬鹿者奴が!! 朕が何と命じたにせよ、そのまゝに受ける奴があるか?! 何故一言も諫止なかつた?! 目付ででもよい諫めなかつた?! 一目反對な風さへ見せてくれたなら、朕はいつでも思ひ止まつたものを!!』

ジョンは摑み掛らんばかりに、猶も立續けに責め立てるので、ヒューバートも今は包み切れず、遂に眞實の事實を打ち開けた——『アーサー殿は生きてをられます』

『何ッ!!』——とジョンは飛び上つた——『あのアーサーが生きてをる?! 直ぐだッ!! 直ぐ貴族共を逐掛けて、お前の口からその事を話せ!!……いや今はすまなかつた。つい一時の癇癪を起して……だがそんな事はどうでもよい。何も云はずに急いで往つて、怒つてゐる貴族を連れ戻して來い!!』

しかし、ヒューバートはやはり思ひ違ひをしてゐた。アーサーは決して生きてはゐなかつた。一旦は危く助けられて、やはりヒューバートの居城の奥に匿まれる事にはなつたけれども、つく〴〵身の將來が恐ろしくなつた王子は、どうしても其處から逃れ出たいと思ひ、水兵服に身をやつして見張の目をくらましながら、首尾よく屋外に脱け出したのはよいが、大膽にも高い城の塀から身を躍らせて飛び下る拍子に、哀れや下なる石に當つて、二つとない命を墮したのである。

無慘に碎かれたその屍體が、塀の眞下に横たはる——殘念にもそれと一足遲れて、ペンブローク、サリスベリー、ビゴットの三伯爵が、同じ城の下に到着した。ヒューバートの居城を探つたならば、アーサーの眞の運命の手懸が知れようと思つたからである。

何事も知らぬ三人がアーサーの死んでゐるすぐ傍まで來かゝる——恰度その時今一人その跡を追つて來た者があつた。それは誰でもないフォールコンブリッヂで、まだヒューバートの白狀を聞かない前のジョン王から、伯爵達を說き伏せる爲に派遣され

た使ひなのである。漸く塀の下の所で三人に追ひついたフォールコンブリッヂが、盛に論じはじめた時、我れ知らず進めた一同の足を引き止めるやうに躓かせたのは、聲なきアーサーの屍體であつた。

『殺人だ!!　立派な殺人だ。最も憎むべき最も汚はしき――否歴史あつて未だ聞かざる極悪非道の大殺人だ!!』

驚きが一先づ休んだ時、伯爵達は聲を揃へて、訴へるやうに叫びながら、フォールコンブリッヂの顔を見る。

『いかにも怪しからぬ次第』

腹立しさうな聲ではあるが、さすがに荒武者もかう答へてから、

『若し』――と疑ひ深さうに――『若し何人かの手で行られたとすれば、全く世にも憎むべき仕業だ』

『「若し」だと?!　「若し」ではない、明瞭な事實だ!!　「大方こんな事ぢやらう」と、我々は以前から想像つてをつた。素より恥知らずのヒューバートの仕業――王の

命を受けたヒューバートの仕業だ。おのれジョン王!!　かくなる上は最早許さんぞ』

――とサリスベリー伯はかう叫びながらアーサーの屍の前に跪坐き――『此の可憐なる少年の死屍を前にして、今日唯今、予はジョン王と主從の關係を絶ち、予の手が尊き復讐の血で見事に彩られる日が來るまでは、快樂もとらず安息も知らず、喪中にある心を以て彼の惡王と戰ふ事を――主よ、此處に於て誓ひまする!!』

此の烈しい宣誓の詞が、天に向つて叫ばれ終ると同時に、殘る二人の伯爵は一聲に結びの言葉を唱へる――『アーメン』(御承知でせうが、「アーメン」と云ふのはクリスチャンが所謂の最後に附け加へて唱へる言葉で、「我等の願望はかくの如し」と云ふやうな意)

此の時早く彼の時遲く、又もや一人息せき切つて、此の場に駈けつけた者がある。別人ではないヒューバート・ド・バーグ。

『お、お待ち下され諸侯方!!』――餘程急いで來たのであらう、ヒューバートはハッ〳〵と喘ぎながら――『陛下のお使ひで參りました。王子アーサーは御無事ですぞ!!』

告げ終つてふと下を見る。ヒューバートは石のやうに立ちすくんで、呼吸さへも發なくなつてしまつた!! 夢ではないか――其處には愛する少年の屍が、冷く横はつてゐたのである。

『來をつたな!! 惡黨!!』――サリスベリー伯はすらりと劍を拔いて――『人殺しの大惡黨!!』

『そ、そんな覺えは……殺した覺えは更にない!!』――と、ヒューバートは必死となつて叫ぶ。

『面倒なッ!! 斬つてしまへ!!』――とペンブローク伯。

今まで默つてゐたフォールコンブリッヂは、此の時身を躍らせて、三人の中間へ殺つて入つた。まづ最も利かぬ氣のサリスベリー伯を威嚇しつける――

『一足でも進んで見よ。フォールコンブリッヂが敵手となる。何だ其劍は?! 俺の目から見る時は、劍ではない燒串だ。そんな物はさつさと捨て給へ!! それとも君の體と一緒に敲き落してお目に掛けようか?! 「あの時は惡魔に掴まつたのだ」と君が

後日までも思ひ知るやうに此の手で其の燒串を、宙に飛ばして差し上げようか?!』

貴族仲間きつての負け嫌ひと云はれた傲慢者のサリスベリー伯も、かうなつては手も足も出ない。澁々相手の言ふ通りに劍を納めるの外なかつた。しかし怒りが止まつたのではないから、いくらヒューバートが辯解しようとも、それには全然耳を籍さず、憤然として立ち去りはじめる。さすがの荒武者フォールコンブリッヂも、之れ以上は手の下しやうもなく、唯口惜しさうに奥齒を嚙んで、フランス軍に參加る爲その場より馬を飛ばす三伯爵の姿を、じつと見送るばかりであつた。

いよ〳〵その姿が見えなくなると、フォールコンブリッヂは改めて、殘れるヒューバートを見返つた――

『おい、一體どうしたのだ? 若し君が手を下して此の少年を殺したものなら――ヒューバート、君の魂は未來永劫救はれる事はあるまいぞ。否自身手は下さずとも、それと承知して默つてゐただけでも、君の罪は許される事ができぬぞ。ヒューバート殘念だが私も君を疑ふ』

『手を下したにせよ、承知したにせよ、否心に思つたにせよ――若し眞實此の私が王子の息を絶つ事に關係してをつたのであれば、私の罪は地獄に墮ちても足りない!! どんな刑罰でも甘んじて受ける!! けれども本當に、私は何も知らないのです。私が城を出掛ける時には、王子は確に御無事ぢやつた!!』

ヒューバートは狂つたやうに叫ぶと、そのまゝ若き屍を抱き上げ、世にも力無き足取りで、城の中へ運び去る。フォールコンブリッヂは見送りもせず、じつと悲しい思ひに沈んだ。しかし考へれば考へるほど、心緒は絲のやうに亂れるのである。遂に正直な此の荒武者は、誰にともなく呟やくやうに、僞りのない所を叫ぶ――

『どうも解らん。どうしてよいか解らん。俺は世の中が恐ろしくなつた!!』

(八) 王冠の手品

一方此の時のジョンの形勢は、實に哀れなものであつた。法王インノケント三世は

形式の上でジョンを處分しただけでは、どうしても其の氣が濟まなかつたものか、今やフランスの皇太子に命じて、ジョン征伐の十字軍を、イギリスに向つて起さしたのである。

しかも、此の飛報が一度傳はると共に、ウェールス(其當時まづイギリス領。地圖參照)は忽ち叛旗を飜へす。スコットランド(まだ本當にイギリス領とは云へず)も直ちにフランス軍に應ずる。ばかりではない。お膝元のイングランドそれ自身が、既に信用できなくなつてゐた。貴族達は擧つてジョンに叛き、ルキ皇太子の旗下に馳せ參ずる。僧侶は素よりジョンを王と認めぬ。次に一般の國人はと云へば、破門の苦みからジョンを怨み、之れ亦――謀叛は起さぬまでも――擧つて王を憎み嫌つてゐる。――ジョンは自分の足下から、大地が崩れ出したやうな氣がした。

しかしジョンと云ふ男は、さすがにアンジューっ兒(アンジュー生れの者が惡がしこい事は前のアンジュー市民を見ても解りませう)であつた。豚のやうに厚顏無恥しいと同時に、惡魔のやうに智慧の働くアンジュー人の性質を、そつくりその儘受けついでゐた。

「唯厚顔無恥しくやりさへすればよい。そして大膽に出さへすれば、逆にフランスが苦しむばかりか、萬事を盛返すことができよう」――ジョンは最後の策として、かうその心を決定たのである。

早速その命を受けた使者が、法王の片腕となつてゐる例のバンドルフの許にやられた。今度は掌を返したやうに、「ジョンは今や前非を悔いて、法王の御赦免を待つてをります。喜んで法王に降服致します故、その代りにフランスに命じて、ジョンへの十字軍を中止るやうに、御取り計らひを願ひます」とかう云ふ事を申し出たのである。

そして恭順を誓ふ證據に、イギリス王の王冠を一時バンドルフに渡す事としたが、之れには別の理由もあつた。眞の信仰眞の宗教を有つてをらぬ人々は、却つて妙に迷信や豫言を信ずるものであるが、ジョンも亦その一人で、可笑しいほどの迷信家であり、「昇天節（クリストが墓より出て天に昇られた日を記念するクリスト教徒の祭日。）の前に、ジョンは王冠を脱ぐやうになる」と豫言者共が云ひ觸すと聞き、内心氣になつてゐたのである。そして今度の機會を幸ひに、一旦自分の手で王冠を脱がう――とかう云ふ事を思ひついたのである。

『どうだ!! それならばよからう。自分は確に昇天節の前に豫言どほり王冠を脱ぐ。そしてその昇天節が來たら、改めてそれを授けて貰ふ。これで天の神もごまかせると同時に、自分を敵とする奴輩の鼻を明す事もできる。自分ながら甘く考へついたものだ』

ジョンの腹の中を割つて見れば、大體右のやうな蟲の良い考へで、むしろ得意になつてゐた。つまり、法王に屈服したとは思はず、法王を利用するつもりでゐたのだ。

（編者曰）十字架の上で死なれたクリストは、墓に葬られてから三日目に復活り、四十日目に昇天されたと、かう云ふ事になつてをりますから、昇天節は、復活祭から四十日目に行はれます。そして、復活祭は、「春分（三月二十一日）後最初の滿月の日の次の日曜日」だと云ふのですから、昇天節も年によつて違ひますが、五月頃だと覺えておかればよろしい。

さて、いよ〳〵昇天節は來た。その日ジョンは、法王の代理バンドルフを王宮に迎へ、恭しく王冠をその手に渡す。即ち、イギリス全國を法王に献上したのである。バンドルフは嚴かに之れを嘉納り、改めて法王の名によつて、之れをジョンの頭に授ける。即ち献上された國土を、改めてジョンに與へたのである。實際は同じ事であるが、

假令形式の上であるにせよ、之れで法王が政治上にも王の上位にあると云ふ事が、證據立てられたとも云へる譯であるから、バンドルフの得意は云ふまでもない。

滯りなく此の式が終ると、バンドルフは直に暇を告げ、フランス軍の陣營に急いだ。今度はフランス皇太子に命じて、イギリス征伐の軍をやめさせ、ジョンとの約束を果す爲である。

恰度バンドルフと入れ違ひに、例のフォールコンブリッヂが、ジョンの許に歸つて來た。ジョンは喜んで迎へたが、その報告は決して良いものではなかつた。「ロンドン市は既にその市門を開いて、フランス軍に降伏し、貴族共はどうしても歸服らうとせぬ」と、かう云ふ情ない報告なのである。

「何?! 貴族は歸つて來ぬ?! アーサーが無事だと聞かされてもか?」

と、何も知らぬジョンは勢込んで訊く。

「現にアーサーが死んでゐるのを――何者かの毒手にかゝつて殺されてゐるのを、貴族等は目前見たのです」

「えッ?! ではヒューバートに欺されたか?! あのヒューバートの惡黨は、確に生きてをると申しをつたぞ」

「いや、ヒューバートの知る限りでは、確に生きてゐたらしい。私もそれは受け合ひます」

ジョンは改めてフォールコンブリッヂに、法王と和睦した事を話すと、案の定フォールコンブリッヂは見る〳〵その顏色を變へる。そのイギリス魂が、我慢できなくなつたらしい。やがて不吉をつけるやうに云つた――

「しかし、多分バンドルフの力では「貴方」の和睦は纏りますまい」――(殊更「貴方の」と斷つたのは、「イギリスの」ではないと云ふつもりであらう)――「だが、萬一纏るやうであつたなら、「我々は決つてお賴みしたのではない。何時でも戰ふつもりだつた」と之れだけの事は、是が非でも、知らせて置いてやらねばなりませぬ。どうか暫時お暇を下さい」

そしてジョンの許可を貰ふと、「イギリスの名譽を護る」爲に、急いでバンドルフ

の跡を追ふ。

一方當のバンドルフも、自分の役目がうまく行くかどうかを、頗る不安心に思ひはじめてゐた。フランス軍の陣營について見ると、ルキ皇太子の周圍には、新しくジョンに叛いて來たサリスベリー伯ペンブローク伯その他の英國貴族が、ずらりと打並んでをり、ルキは之等の人々に、可笑しいほどの御世辭を振りまいてゐる。勿論ルキのつもりでは、此の連中に用があるのはジョンを討ち滅すまでの事で、いよ〳〵ジョンが滅びたならば、次には用捨なく此の連中も敲き潰してしまふ心なのだ。年こそ未だ若いけれども、ルキはバンドルフに敎へられた事を、良過ぎる位によく呑み込んでゐた。バンドルフが何時ぞやそれとなくルキをそゝのかした言葉どほり、アーサーが死んだを機會として、今やルキはイギリス王の位を堂々と望んでゐたのである。……バンドルフは一目見た時から、「幸先が惡いな」と心に思つた。

果せる哉、バンドルフの云ふ事を皆まで聞かず、ジョンは明日に拒絶るのであつた

『私はローマの奴隷ではありません。本來此の戰爭は、貴僧の一言から起つた物ではあるが、それを實際に行つて來たのは、抑々何人でありませう？　多くの兵員と糧食とを集めて、今日まで骨を折つて來たのは、とりも直さず此の私ではないか。今や私は苦心の結果、イギリスの半分を征服し、あらゆる勝機を手に握つてゐる。然に何事ぞ、此の今となつて、貴僧は軍を返せと云はれる。なりません!!　斷じてなりません!!』

恰度此の時の此の席へ、フォールコンブリッヂが現れたのである。眞紅になつてゐるルキ皇太子と、途方に暮れてゐるバンドルフとを、冷かに見たフォールコンブリッヂは、「占めた、今だ!!」と腹の中で喜びながら、イギリス王の代理として、すつくとその場へ立ちはだかり、ルキ皇太子の面と向つて、散々に之れを罵しり出した——

『我がイギリス王は、君と君の少年軍（ルキ自身が若年故朝つて云ふのです）とを國土の外に叩き出す事を、此の私に命ぜられた。何だ、生意氣な!!　何時ぞや前度の戰爭の時、私は此の手で君の家の戸を碎けるばかり敲いてやつた。その時の事を忘れをつたか?!　彼の時の

貴樣は悲鳴をあげて、梯子を飛び上つて隱れをつたらうが?! ぶる〳〵身を慄はせて、一晩中小くなつてゐた上、貴樣の飼つてゐる牡鷄が――あのガリア（フランスの地は昔のガリア人の本土です）種の鷄が、夜明の鬨を伴つたのさへ、イギリス人の聲かと思ひ、縮み上つて泣きをつたらうが?! よいか、よく聞けよ。貴樣の本國フランスで、それだけ貴樣を恐がらせた此の手が、此のイギリスでは弱るとでも、鈍くなるとでも思ひをるのか!!』

これだけ皇太子を威嚇つけると、漸く氣がすんだものか、今度は並居る謀叛貴族共に向ひ、殘る所がない程に、一人々々之れをこき下しはじめる。

『やかましい!!』――と遂に皇太子はしびれを切らした――『成程貴樣は口だけは達者だ。解つたから餘計な悪痴はやめろ!!』

バンドルフは慌てゝ口を出さうとしたが、フォールコンブリッヂは、その暇も與へぬ。そして雙方喧嘩腰のまゝで、其の場は物別れと云ふ事になり、和睦も何も滅茶々〳〵となつてしまつた。

（九） 惡王の御代

講和の見込が絶えたからには、いよ〳〵英佛の開戰である。しかし此の度の戰爭では、兩軍とも痛手を負つてしまつた。

ルキ皇太子のフランス軍は、一時破竹の勢ひで、イングランドの南部を征服したけれども、それも長くは續かなかつた。その軍に糧食を供給る爲にカレーを發した艦隊が、グッドウキン・サンズ（イギリスのドーヴァー港の北方にある砂の洲で、古來難破の場所と云はれてゐますが、同時に天然の防波堤となつてゐます。地圖參照）で難破してしまひ、大痛手を喰つた上に、味方となつてゐたイギリス貴族も、ルキの遣口に憤慨して、遂に離れ去つてしまつたのである。

一方ジョンはどうであつたか?! 苦戰ながら無理押しに行軍して、西方ウェールスの國境から、一氣にイングランドの中部を横ぎり、遂に北方のリンコルン州に達して貴族共の計畫の裏を掻いた――それは大出來であつたけれども、不幸にしてその途中

熱病に罹り、ウーズ河口のリンと云ふ都市から、名高いウォッシュの入江（リンコルン州とノーフォルク州との間にある入江で、ウーズはじめ四つの川の河口となつてゐる爲に、無數の土砂が流れ込み、入江全體が洲や淺瀬で一杯になつてゐるので名高い所。地圖參照）を渡つて、新らしく北進する時となると、非常に病が重くなりはじめた。しかも、沼のやうに砂深いウォッシュの淺瀬を全軍が惱み〳〵渡る途中、突然に潮がさして來るのに出逢ひ、携さへてゐた荷物も財產も、殘らず波に取られたのである。

辛くも對岸（リンコルン州）へついた時、重りに重つた熱病にがた〳〵と身體を慄はせながら、波には濡れ行軍には疲れ、更に苦勞にやつれ果てた暴君ジョンの淺間しい姿は、さすがに涙を誘ふものがあつた。取りあへず岸に近きスワインスヘッドの僧院に、一時病を養ふ事となる。

噂さに云ひ傳はる所によれば、王は此の僧院の僧達の爲に、毒を盛られたと云ふ事である。成程王が日頃の行ひから見れば、その位の怨みは受けてゐたかもしれぬ。しかし果して毒殺かどうか、事々しく詮議する必要はない。

臨終の床に臥したジョンは、熱に涸いた唇を開いて、苦しい最後の呼吸の下から、

盛に新鮮しい空氣を求め、『地獄の火が身の內で燃えるやうぢや!!　廣々とした所で死にたい!!』と痛ましくも叫び立てるので、一同は僧院の庭先まで、死に行く王を運び出した。

若き王子ヘンリーの眼から、耐へかねて流れ出た熱き涙が、そのまゝ頰を傳はつて、父なるジョンの顏に落ちた時、

『涙が泌みる!!』

と唯一言。之れを別れの言葉として、ジョンは遂に眼を瞑ぢた。ジョンとしても失意の果て——イギリスとしても悲運の絕頂——此の重大な時機に於て、ジョンは遂に目を瞑ぢた。イギリスの名を愛した暴君の一生は、かくして永久に終つたのである。

此の非慘なジョンの死が、侵入軍の足下に蹂躙られてゐた祖國の運命を回復さうとは、死に行く者自身も思はなかつたであらう!!　しかし、イギリスの運はまだ盡きなかつた。

ジョンに次いで王位についた若きヘンリー三世は、忽ち全國の囑望を集め、全貴族

の應援を得た。今は勝ち誇つたフランス軍も、長くその地位を保つ事はできぬ。ルキ皇太子は敗軍を纒めて、本國に歸るより外はなかつた。

世に云ふ惡王ジョンの御代――苦痛多く事變繁かりし此の王の御代は、果して何を今日の我々に敎へてゐるであらうか？　フォールコンブリッヂの口より發た賢く勇しき愛國の言葉は、何よりもよくその敎訓を、道破してゐると云はなければならぬ。あらゆるイギリスの少年少女が、心に深く記憶すべきは、實に次の其の言葉である――

此のイギリスが唯一度でも　傲れる侵入者の足許に
傷も負はさずおめ〳〵と　甲を脱いでひれ伏した例は
過去にも聞かぬ――將來とてもあるまい
見やれ　諸侯の面々も　今は母國に歸り來たつたぞ
來たるぞ世界の三つの隅より　双を連ねて來たるぞ敵共
いでや一泡吹かせくれんず。　此のイギリスのかくある限り
イギリスのイギリスを裏切らぬ限りは　如何なる事にも悔みはせぬぞ

（大尾）

（編者曰）　本篇の最初に英國が大領土をフランス内に有つてゐたと書いてありますが、ジョンの御代にそれは殆どフランスの爲に捲き上げられてゐます。殘つたのはアクキテーヌの一部位な物です。しかも法王と爭つたりして本國を苦しめた事は非常な物です。「一體何處が愛國的だ」と申される讀者もありませう。しかしそれは、「日本とイギリスとの國體の差異」と云ふ物が、よくお解りになつてをらぬからです。既に本篇の最初に述べました通り、英國の歷史と日本の歷史とでは、全然と云つてよい程異つてゐます。日本のやうに殆ど一つの民族で出來上つた國ではなく、又万世一系の皇統が連綿として續いてゐる國柄ではなく、幾つもの民族の寄合世帶で出來上つた上、王家も幾度か變つてをり、ノルマン人が來て王となるかと思へば、フランスの貴族がやつてくると云ふ有樣。その度に領土も殖えたり減つたりする次第だつたのですから、王にしろ誰にしろ「本當に之が自分の祖國だ」と云ふ考へが起らなかつたのは當り前であつたのです。いや英國ばかりではない他の國々でもさうであつた。さればこそルキ皇太子が英國王とならうと思つたりもするのです。後には逆に英國の王がフランス王とならうとして有名な百年戰爭を起したりもしてゐます。此の時に當つて、とにかくジョン王が「イギリス王のイギリスぢや」と叫んだ事は、フォールコンブリッヂの「愛國の言葉」と共に、特筆大書すべきではありませんか。英國の王家はその後も屢々變り、オランダ邊りから來て王となつた人もあります。眞に「大ブリテン國」と云ふ現在の所謂英國が出來、現在の王家が王位に即いたのは、ずつと〳〵後――今から約二百餘年前の事です。之は此機會によく御注意あらん事を希望します。眞に「大ブリテン國」と猶貴族とか伯爵とか云ひましたが、之も勿論今の貴族とは違つて、まづ德川時代の大名と同じ物です。貴族と書いたのが大名で王と書いたのが將軍――と、此位に考へられても一向差支ありませぬ。

附錄　シェークスピア小傳

「ジョン王」の中に入れて置いたイギリスの地圖を見て戴くと、イングランドとウエールスとの境をシヴァーン河と云ふ河が流れてゐませう。そして其先が左右――即ち西と東にYの字の形に分れてゐませう。ウェールスから來る西の流がジヴァーン河の本流で、東から來るのをエヴォン河と云ふ。此エヴォン河の流域――あの地圖で云へば「イングランド」の「ラ」の字の邊が、ワーウィックと云ふ州となつてゐます。中央を貫くエヴォン河のお陰で、州の大半は潤々した平野。此ワーウィック州の西南部――エヴォン河の北岸に、其名をストラットフォード・オン・エヴォンと呼ばれる小都會が一つあります。別に大した町でもないのに、驚く程各國の人が訪れる。殊に文學に親しむ者で、一度足を英國の地に蹈入れた旅人は、必ず此町に立寄つて、「ヘンリー通は何處か」と訊く。そして其通の西側にある古ぼけた建物の前まで來ると、

感激に充ちた恭しい態度で、之を仰ぎ見るのである。――何故か？　今を距る三百六十年（西暦一五六四年四月廿三日）「大英國はよし滅ぶとも、此人の名だけは滅びぬ」と云はれた文豪ウィリアム・シェークスピアが、此建物の一隅で生れたと云はれてをるからであります。

シェークスピアの父はジョンと云つて、最初は近村の百姓であり、後此町で羊毛などの小い店を開いた人。地主の娘メリー・アーデンと結婚したお蔭で、町長にまでなつたけれども、勿論敎育のある人でもなく、後には大變に失敗して、貧しい生活をする事となつた。妻のメリーとの間に、男四人女二人――合せて六人の子供が育つたが、其總領のウィリアムこそ、即ち後年の文豪である。

文豪は其少年時代を如何に送り如何に育つたか？　其頃ストラットフォードには、無月謝の小學校があり、文豪は此學校で、ラテン語ギリシャ語フランス語等の初歩を學んだらしいが、勿論大した學問ではない。眞に文豪を敎へ育てたのは、ストラットフォード・オン・エヴォン地方の美しい自然なのであつたらう。――なだらかな丘の

間を、牛の遊ぶ牧場や雲雀の啼く畑が連なり、楡や山毛欅の濃い木立が平和な影を其上に落す。牧草の根を洗ふエヴォンの流には、名物の白鳥が靜に浮び、某の貴族の所有である彼方の森の茂みには、鹿や狐が温順く潜む。——此美しい自然こそウヰリアムの師であり友であつたらうと、懐しく想像されるのである。

父の失敗が酷くなつた爲、學業を續ける事ができず中途にして學校を退學したのは、文豪が十三の頃であつた。其後は牧場で働いたりして父の家業を助けてをり、十九歳の時近村の婦人アン・ハサウェーを妻に迎へて、二男一女の子を儲けたが、一五八六年（二十二歳）遂に唯一人故郷を後にして、新しい運命を開拓くべく、首都ロンドンの檜舞臺に出た。其理由や目的に就ても、色々な話が傳つてゐるけれども、眞實の所は解らない。兎に角可成の苦勞をして、オックスフォードよりロンドンへと出て來た。最初は或る劇場の木戸番の樣な物でもつとめたらしい。

一五八六年頃のロンドンは、どんな物であつたらう。人口は漸く二十萬位、今日から見れば小都會であるが、當時では堂々たる大都會で、新進の活氣が滿ちあふれた世

男通商の中心地であつた。國王は名高いエリザベス女皇、長い内亂が漸く收つて、國家統一の大業も全く其緒につかうとしてゐる。外ではスペイン其他に對する外交關係が難しくなつて、國民の「愛國心」は絶頂に達し、此年より三年目には、英將ドレークがロイト沖でスペインの無敵艦隊を擊破してゐる。しかも文明史上から云へば、所謂「文藝復興」の大浪が今し英國に押寄せた所だ。

此首都に現れた二十二歳のシェークスピアは、幾多の努力を續けた結果、まづ役者として其名を擧げ、次いで詩人として劇作者として、稀なる天才を現しはじめた。最初に文名をあげたのは、某伯爵に捧げられた二つの詩であつたと云ふが、一方には當時一流の文學者クリストファー・マローと合作して、初期の史劇を公けにし、やがては自分一人の手で、喜劇に悲劇に英國史劇に、新境地を開いて行つたのである。

かくて、一五九〇年の頃より文筆に親むこと凡そ二十三年。三十七種の劇と三篇の詩とを著して、英國否世界の劇文學上、比類なき大寶庫を遺したのである。後世多くの學者は、其作品を年代順に列べる爲だけに半生を費して吝む所がない。

第一期（一五九〇——一五九三）
史劇『ヘンリー六世』『リチャード三世』『ジョン王』
喜劇『戀の無駄骨』『間違ひの喜劇』等
第二期（一五九四——一六〇一）
史劇『リチャード二世』『ヘンリー四世』『ヘンリー五世』
喜劇『眞夏の夜の夢』『ヴェニスの商人』『悍婦ならし』『御意のまゝ』等
第三期（一六〇一——一六〇九）
悲劇『ハムレット』『オセロ』『リヤ王』『マクベス』『ジュリアス・シーザー』『アントニーとクレオパトラ』『コリオレーナス』等
喜劇『トロイラスとクレシダ』等
第四期（一六〇九——一六一一）
傳奇劇『シムベリン』『冬の夜話』『あらし』等

一六一一年と云へば、シェークスピアは四十七歳である。既に名聲も大いにあがり、財政も豐となつたので、ロンドンと故郷とに大邸宅を建て、遂に一六一二年頃より、全く故郷に退隱して、懷しきエヴォン河上の自然と靜に親む事となつた。此間に父母は世を去つたが、新に初孫を儲けたりして、穩な餘生を送つたらしい。

かくて、一六一六年の正月より病に罹り、三月遺書を作り、遂に四月二十三日、此

世に生れたと同月同日を以て、偉大なる文豪の魂は、永久に天に昇つたのである。行年五十三歳。遺骸はストラットフォード敎會に葬られ、墓石には次の四句が刻まれた。

よき友よ　主エスの爲に
此の下を　發掘き給ふな
幸福あれ　此の石をかばふ者に
呪詛あれ　我が骨を動かす者に

春風秋雨三百年。此願は正しく守られて、大文豪の遺骸は、今も猶ストラットフォード・オン・エヴォンの邊り、影暗き菩提樹道の盡くる所に平和な眠を續けてゐる。

其死後に於ける名聲は日一日と加はつて、十八世紀以降に於ては殆ど神の樣に尊ばれ、幾多の名優は先を爭つて、其作物を上演した。我國でも坪内逍遙博士の如き「日本のシェークスピア」と云はるゝ人が、現れてをらるゝと云ふ事は、少年少女諸君に於ても、既によく御承知の事であらう。

本書の原作者クキラ・クウチ氏は、一八六三年英國のコーンウォールに生れ、Qの假名によつて幾多の名作名評論を公にした英國文壇の大先輩。今はオックスフォード大學で敎鞭をとつてゐられます。有名なスティーブンソンの未完小説「セント・アイヴ」を完成した人として特に名高い。

附錄「コリオレーナス」及「ジュリアス・シーザー」人名讀方對照

（括弧外ハ本書、括弧內ハ坪內氏譯ノ讀方）

コリオラヌス（コリオレーナス）
カイウス・マルキウス（ケイヤス・マーシヤス）
ティツス・ラルテウス（タイタス・ラーシヤス）
コミニウス（コミニヤス）
メネニウス・アグリッパ（メニヽヤス・アグリッパ）
シキニウス・ヴェルウス（シヽニヤス・ヴェルータス）
ユニウス・ブルツス（ジューニヤス・ブルータス）
ツルス・アウフィデウス（タラス・オーフィディヤス）
ヴォルムニア（ヴォラムニヤ）
ヴァルギリア（ヴァージリヤ）

ユリウス・ケーザル（ジュリアス・シーザー）
マルクス・ブルツス（マーカス・ブルータス）
カイウス・カシウス（ケーヤス・カシヤス）
マルクス・アントニウス（マーカス・アントニヤス）

カスカ（カスカ）
トレボニウス（トレボニヤス）
リガリウス（リゲーリヤス）
デキムス・ブルツス（デシヤス・ブルータス）
メテルス・キンベル（メテラス・シンバア）
キンナ（シンナ）
キケロ（シセロ）
オクタヴィアヌス（オクテーヴィアヌス）
エミリウス・レピダス（エミリヤス・レピダス）
アルテミドルス（アーテミドーラス）
ルキウス（ルーシヤス）
ピンダルス（ピンダラス）
ティティニウス（タイチニヤス）
カルプルニア（カルパアニア）
ポルティア（ポオシヤ）

大正十四年七月十五日　印刷
大正十四年七月二十日　發行

（定期刊行書第三卷）
非賣品

シェークスピア史劇物語

著作者　課外讀物刊行會編輯部

發行兼印刷者　課外讀物刊行會代表者　武井光雄　東京市麹町區飯田町五丁目十九番地

印刷所　信光堂　東京市麹町區飯田町五丁目十九番地

發行所　東京市麹町區飯田町五丁目十九番地　課外讀物刊行會　電話四谷五七七一番

課外讀物刊行會設立趣旨

□少年少女諸君（十二三歳より十六七歳まで）の課外讀物として出版される書籍は夥しい程でありますが、其多くは營業本位の出版であり漫然時々の流行を逐つて刊行される樣に見受けられますのは、私共が豫てより遺憾とする所でありました。隨つて從來は、讀者たる少年少女諸君及父兄諸氏と出版者との間には何の連絡もありませず、讀者同士父兄相互が之に就いて意見を交換される機關も全く備はつてをりませぬ。

『何とかして讀者・父兄・出版者の三者が相寄つて書物を研究し出版して行く事はできぬものであらうか』――是が私共の本會を起した第一の理由であります。

□今後の國民には世界的の常識が必要であります。『桃太郎』の物語を知らずしては日本語は話せませず、『神代の傳說』を辨へずしては日本の新聞も讀めませぬ。是と同樣、今や世界の日本である我國の國民には、世界の一員の常識として、讀んで置くべき書物知つて置くべき事柄が多々あります。記憶力が强く讀書力の盛な少年少女時代に之に觸れて置く事は、非常に必要であります。しかも之等の書物や事柄の中には、少年少女時代でなくば純粹の興味の起らぬ物が中々多く、其時代に知つて置けば何でもなかつた事を成年後に改めて智識として覺えると云ふ不自然さに就いて今日の大人達は屢々歎聲を漏してゐるのであります。

『願はくば次の時代の人々には此種の嘆聲を繰返させたくないものだ』――是が私共の本會を起した第二の理由であります。

□課外讀物は教科書ではありませぬ。如何なる良著も、少年少女諸君が面白さに心を躍らせて讀むのでなければ、課外讀物としては落第であります。覺えよう教へられようと云ふ特別の努力もなく唯面白がつて讀みながら、驚く程の教訓と智識とを其中から得て行く美點こそ、少年少女諸君の誇であり課外讀物の眞の覘ひ所であります。まして種々の面白き物が常に諸君を誘惑しつゝある今日、

『眞に良き面白き讀物を諸君の前に提供して、美しい心と豐な智識とを自然に養つて頂かう』――是が私共の本會を起した第三の理由であります。

課外讀物刊行會々則

第一條　本會ヲ課外讀物刊行會ト稱ス

第二條　本會ハ本部ヲ東京ニ置キ支部ヲ各地ニ設ク

第三條　本會ハ初等及中等學校生徒ノ課外讀物ヲ研究スルヲ目的トス

第四條　本會ハ其目的ヲ達成セムガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ

一　定期刊行書出版
一　一般圖書出版
一　雜誌發行
一　研究會講演會開催
一　圖書目錄作製

第五條　本會ハ本會ノ趣旨ニ贊シ會費トシテ年額拾貳圓ヲ納入スルモノヲ以テ會員トナス（中途退會者ニハ會費ヲ拂戻サズ）

第六條　本會々員ハ本會出版ノ定期刊行書（非賣品）及ビ雜誌（非賣品）ノ配布ヲ受ク

第七條　本會々員ハ本會主催ノ研究會講演會ニ隨意出席スルコトヲ得

第八條　本會々員ニ限リ本會出版ノ一般圖書ハ總テ之ヲ二割引ニテ購入スルコトヲ得

第九條　本會々員ノ子弟ニシテ滿十七歲未滿ノ者ヲ會友トス（會友ハ謹メ本會ノ認定ヲ要ス）

第十條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

主事（若干名）　顧問（若干名）

第十一條　本會ハ會員ノ相互組織トナシ會員二千名ヲ基礎トナシテ其以上ハ會員ノ增加スルニ從ヒ漸次會費ノ拂戻ヲ行フモノトス（隨テ本會出版ノ定期刊行書及雜誌ハ所謂豫約出版物ニ非ズ）

本會役員

（イロハ順）

顧問	外國語學校教授	吉岡源一郎
同	第一外國語學校々長	村井知至
同	日進英語學校々長	佐川春水
主事		武井光雄
同		梅德
同		天城純

◆會員規定◆

一、甲種會員　會費一期分(年額)拾貳圓ヲ一回ニ納入スル者
申込當日ヨリ二ヶ月以內ニ納入

一、乙種會員　會費同拾貳圓ヲ二回ニ分チテ納入シ別ニ手數料
貳拾錢ヲ納入スル者
(第一回)　申込當日ヨリ一ヶ月以內ニ六圓貳
拾錢納入
(第二回)　定期刊行書第三卷配本ト同時ニ六
圓納入

一、丙種會員　會費同拾貳圓ヲ毎月ニ分チテ納入シ別ニ手數料
壹圓貳拾錢ヲ納入スル者
(第一回)　申込ト同時ニ貳圓貳拾錢納入
(第二回以後)　定期刊行書又ハ雜誌配本ト同
時ニ壹圓宛納入

◆第一次計畫◆

一、圖書出版　第一次計畫トシテ五年間ニ定期刊行書三十卷
一般圖書三十卷ヲ會員會友ト共ニ研究シツヽ、
出版。
(イ)定期刊行書　世界ノ名著傳說少年小說等。會員無料頒布。
第一期(一年)間ニ六卷ヅヽ、隔月出版。
(ロ)一般圖書　主トシテ科學智識普及ヲ目的トスル物。會員
二割引。

二、雜誌『次の時代』發行　少年少女諸君ノ自由ナル同人雜誌。會員
無料頒布。隔月發行。會員會友投稿自由。

三、研究會講演會開催　少クトモ年四回ヅヽ、開催。研究及親睦ノ機
關トス

四、圖書目錄作製　各初等中等學校ノ應援ヲ請ウテ完全ナル課
外讀物目錄ノ作製ニ努力シ年二回結果發表。

□第一次□　□第一期□

◆定期刊行書◆

第一卷	第二卷	第三卷	第四卷	第五卷	第六卷
トマス・マロリー原著	クキラ・クウチ編	シルレル原著	ホーマー原著	ヴィクトル・ユーゴー著	テニスン　ロングフエロー　スコット原著
アーサー王物語（既刊）	シエークスピア歴史物語（既刊）	ウイリアム・テル物語（近刊）	イリアッド物語（十四年六月刊）	海の勇者（同　八月刊）	名詩物語（同　九月刊）

終